

產政塾

VII

產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである

目次

・産政塾の発刊によせて

勸中部産業・労働政策研究会

・徒然・・・

アイシン労働組合 川村博隆

・雑感・・・

豊田市役所 阿久津正典

・人生について思う・・・

勸デンソー 村瀬俊

・ベトナムへの旅・・・

豊田合成労働組合 河路直人

・半生の棚卸し・・・

全トヨタ労働組合連合会 小林雅昭

・扇の要・・・

松坂屋労働組合 白井満

・これからの時代に生きる・・・

中部電力勸 星野悟

41

33

27

19

13

7

1

・「労働組合に未来はあるか」	中部電力労組本部	柴田 伸彦	49
・最近思うこと			57
・ただ今、模索中！	トヨタ自動車㈱	小倉 克幸	65
・Tell to your heart	アイシン精機㈱	勝見 寿美子	71
・21世紀の日本	トヨタ自動車労働組合	西田 明生	79
・96年夏 雑 感	日本特殊陶業㈱	高橋 剛	85
・地元名古屋の発展のために	トヨタ車体㈱	吉田 茂	93
・松下幸之助はえらい！	名古屋鉄道㈱	吉川 篤史	99
・「小説 労働組合消滅のとき」	デンソー労働組合	田中英司	105
・産政塾活動記録	㈱中部産政研	佐宗 正典	115

産政塾Ⅶの発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、この度第七期を終えました。

産政塾は、異業種の若者十数名にご参加をいただき、約一年間に渡って行うセミナーであります。

セミナーといっても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルではなく、参加したメンバーが自らの企画でテーマや講師を選び、現地に出向して体験や教えを請うという活動を通して、学ぼうとするものであります。

また、産政塾は異業種の人達の集りであり、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を超えて、お互いが夢を語り、天下国家を論じ、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーを生み出そうとするものであります。

こうした活動を通して、参加者は自らの考えを検証し、自分自身の存在や役割を自覚するという、言うならば自らを磨く道場といったものであります。

今回、産政塾に参加した人達は三十才前後の若者十六名であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集りになりました。

人間形成の基本の時期は青春期であるといわれておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいといえます。一応仕事にも慣れ自分で判断できる能力もできつつある。精神的にも肉体的にも充実しており、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活動する時期であります。

こうした若者達の集りである産政塾は、約一年間に亘ってお互いが夢を語り、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そしてこの度セミナーを終了いたしました。

このセミナーを通じて、参加者一人一人が新しい次代に対応するパラダイム、ものの考え方を築く

ための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第七期生がセミナーを通して得た様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマンスと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。

また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加してもらうのは限られた人達であります。こうした冊子を通して一人でも多くの人達の共感を呼ぶことができればと思つて発刊をした次第であります。塾生と同世代の人達の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思ひます。

なお、産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ関係各位の皆さんに感謝を申し上げますと共に、産政塾および塾生に対して今後共ご指導・ご声援を賜わることができれば誠に幸ひであります。

最後に、私ども（財）中部産業・労働政策研究会の今期の期変わりに、塾長および産政塾事務局をはじめメンバーが大きく交替したこともあり、この塾誌の発刊が遅れましたことに対して塾生の皆様および関係各位の皆様深くお詫び申し上げます。

徒 然 . . .



アイシン労働組合

川 村 博 隆

〔プロフィール〕

かわむら ひろたか (33歳)

- 1963年 9月15日 名古屋生まれ
- 1986年 アイシン精機入社
営業に配属 (部品の見積り・価格交渉?)
- 1994年 労組出向
賃金を担当 (人間の見積り・価格交渉?)

〈家族〉 嫁 (33歳)、長男 (6歳)
長女 (4歳)

〈趣味〉 ビデオ鑑賞 (恋愛もの・西部劇以外)
音楽鑑賞

(太田裕美がやめられない)

〈願い〉 タイム・マシンが欲しい

「書け」と言われて仕方なしに書く。納期を一ヶ月余過ぎている。苦痛の作業に取りかかる。要求ボリュームが過大ゆえ、テーマ選定は重要だ。衆院選直後であり、政治家・選挙制度・無関心層・日本の行く末について一言あるのだが、一言しかないのではやめる。本音を書くことにする。多分、筋が一貫するだろう。この職場で三年目を迎える。嘘（自分自身の価値観と異なるという意味）への抵抗感も薄れたが、限られた者しか読まないこれについては意味がないので、何年後かに自分自身が読むためのメモに使わせて頂く。お許しを。

実は、第一回会合の時、既にテーマは決まっていたような気がする。このことは知っていたし、同じような歳の者の集まりの中の自己紹介で、数人の「家族」に関する話に大きな違和感・反発を覚え、一度自分もよく整理しておいた方がいいだろうと思っていた。「家族がどうした」というスタンスの人間なので、多分後で苛められる側になるだろう気がする。中学の頃、「人間失格」で読書感想文を書いた。さして読みもせずタイトルに引かれ、「自分も結構ひどい奴だよ」と、内面をさらけ出して後で悔やんだ。同じ過ちを繰り返すのか、いちびりなのか、露出狂なのか。既に指は止まらないので、叩きつづける。

「何のために生きるのか、働くのか、家族とは何か、それぞれ答えよ」の問いに対し、とりあえず何らか人は答えるだろう（どれくらい考えたレベルかは別として）。多分自分は大半に納得できないと思う。「納得してもらおう必要などない」というのも尤もで、それが価値観の違いなのだが、そこでも

う一度確認したくなる。「本気？ 結論？」（具体的な内容を書かないのは最後の保険であり、判りくさについてはお許しを。）

自分の整理かつ想像していただくネタとして、自己分析を若干。自分は末っ子で、鍵っ子だった。親の教育方針は世間並みであったが、結果としては兄弟二人立派に成人し、成功だった。共働きのなか、苦勞もしてくれたのだろうが、こちらも努力したし、不思議なバランスの中で、今に至ってる気がする。但し、自分はこんなふうである。①エゴ ②アウトサイダー ③オナル ④理想主義 書き出すとキリがない。心理学は知らないのですが、環境やそれぞれの相関・分析はさておきが、結構女々しい、ぐちゃぐちゃとした感性である。①が非常に強烈で、もう一つ加えると、三十過ぎててもガキである。多分、死ぬまでガキだろう。これが、価値観のベースである。

「明日死ぬかも知れない」世の中である（それにしても、本人死亡が多いなあ）。長生きに興味はない。誰のために、何のために生きるのか。自分のために決まっている。自分がより気持ちよく生きていければそれでいい。気持ちいいと思うことの価値観の相違は仕方ないが、真似できないこと・人が多い。家族が不幸であるよりは、幸せのほうがいいのであるが、自分の気持ちよさとの関係では重きを置けない。世間体を保つぐらいが限界である。気を悪くしないでいただきたいが、嫁にサービスなどできないし、子供の各種排泄物には触れない。昨年、親へのP.L法適用について書かれたが、これを免れる程度で行きたいし、嫁も子供も個人として、好きなように生きていけばいい。「責任」という

ことを言われれば、少々揺らぐこともあるが、それでも言い返す。所詮人間は動物であり、最低二人成人させれば、「種の保存」的にはジャンジャン。ルールさえ冒さなかったら、後は本能。自分にとっては、子供や後世に何かを残すことなど何の意味もない。親の面倒は見るべきだが、高度に発達した医療には疑問もある。

かなり支離滅裂になってきた。とても「参政塾Ⅶ」に相応しいものでないのも承知で、まだ続く。では、自分の気持ちいいこととは何だろう。お叱りを受けることを免れないだろう自分にとって、それでも余りある「夢」らしきものはあるのだろうか（本能を満たす物はすべて気持ちいい。そりゃ当たり前で、さておき……）。とりあえず気持ちのいいことは「仕事」だろう。やり遂げること、成長すること、認められること、連帯。すべて快感である。働かずとも充分に余りある資産を持っている場合には、多分働かないのだろうが、あり得ないことはさておく。実際、周りにこの手は多い。やむを得ず、立场上「あかんよ。」と言わざるを得ない時もあるが、なんと虚ろなことか。その人がどうなるかと知ったことではないが、自分のために言いたくない。自己分析の追加に、「マンネリ大っ嫌い」がある。仕事は、能力の向上とともに変わるし、部門の異動もある。環境の変化も魅力的だ。さすがに十年も同じ部署・同じ仕事はしたくないが、高原状態の時でも、「志さえあれば、必要なときに必要な師に出会える」ものである（これは実感である）。夫婦生活・家庭は、テレビドラマの如くマンネリである。サザエさんのようだ。「子供の成長・教育の何がマンネリか」とも言われるだろうが、やっぱりマンネリとは思えない。どうなっていくかは、想像に難くない。嫁がどう思っているかは別として、

この点には感謝している。

「仕事が夢か？」と言われれば、そうではない。強烈ではないが「夢」はある（矛盾の中に存在するので、すぐにボロが出るだろうが……）。安室が「叶えられないのは夢じゃない。」と、ガキのくせに言ってるが、どうしても逆にしか思えない。自分の中では、叶えられるのは単に「目標」である。そして、この諦めが強烈さを失わせる。諦めの理由は親族である。天涯孤独の身ならば、トライしたかも知れない（その環境のなかで、この夢を持ったかどうかは別として）。親族の存在が、夢を諦めさせた（諦めたので、夢ではないのかもしれないが）。ダメ押しに、家庭を持ってしまった。言い訳っぽい、夢と家族・家庭との天秤では、夢が重い。子供が独立し、親が順番どおりとなり、定年を迎えるタイミングでは、離婚の可能性はかなり高い（当然、向こうからの要請）？ その時には、トライしたるうかなあ（書いてて虚しい。どうも夢の話しは分が悪い。政権構想を持たず言いたいことを言うサウスポーのようである……）。

そろそろ締めたい。もう一人のアムロは、あるがままの姿をみれば、そのものの本質を見抜けると思う。かくりたいものだが、書いてて思うことは、「やっぱりガキだなあ。エゴというか、利那主義というか。何か逃げてるだけか。」ということだ。実は自分自身が真剣に考えてない。全てについて、結論を出すこと・長期ビジョンをたてることを避けてる気がする。仕事は楽しい（冒頭の「嘘への慣れ」については、組織としての哲学の理解であり仕事を嫌うものではない）が、サラリーマンという

気楽な立場のなかでの話である。与えられた物については、かなり自由に方法・進め方は決められる（当然、与えられる物は選べない）。しかし、これも自由だと言われると、逆に困ってしまうのかもしれない（ちょっと情けない）。「金を貰ってるんだぞ。プロの意識を持てよ。」と、後輩に言っていた自分だが、こけた時にたいした責任も負わされない・負わずに済む今の状況は、確かに疑似クラブ活動的である。ゆえに、楽しいのであろうか？ 本質がそれくらいのものだとしたら、これだけ家庭をいい加減（殆ど弱い者いじめ）に扱っている自分は、やはり責められるべきかもしれない。

しかし、しかし、今の気持ちは偽れない。「いつ死ぬか判らない」と言うのは真実であり、今死んでも多分後悔はしないだろう。怖くて今回わざと結論を避けた気もするが、次に機会があれば再度試みたい（できれば、このメンバーと酒でも飲みながら）。その時まで、家庭があればの話だが…。

【関係者へのお願い】 本件について、家庭への情報提供は厳に謹んで下さい。既に嫁の親族には愛想を尽かされており（ばれてる）、あまりシャレになりません。なるようになって構わないのですが、無理にトラブルを背負いたくもないもので…。

雑 感

～産政塾に出会った9か月に思ったこと～



豊田市役所 企画部企画調整課

阿久津 正 典

〔プロフィール〕

あくつ まさのり (34歳)

- 1962年 愛知県豊田市生まれ
- 1985年 豊田市採用
総務部庶務課配属
- 1988年 市長公室企画課へ
総合計画等企画業務を担当
- 1990年 年度途中で市長公室国際村推進室
へ
- 1992年 企画部企画調整課へ出戻り
現在に至る
- 〈家族〉 妻、両親、アフガンハウンドのナ
ンシー
- 〈趣味〉 スキー、テニス、運動後のビール

九月の終わり、初秋の晴れた某日である。こんな日は外でMTBやテニスでもして健康的に過ごしたいものだ……が、予告されていた卒業論文の提出締切日に限りなく近い。太陽の誘いを振り切り、どこかへ連れていってという妻も振り切り、とりあえずワープロに向かっていく。テーマは自由というのを良いことに、思いつくまま駄文を連ねることになることを予めご容赦願いたい。

一 産政塾との出会い

昨年の晩秋のある日、なにやら妙な顔をした人事管理室係長が近寄ってきた。嫌な予感が脳裏を走った。「異動デモマタアルノカナ？」予感の外れた。「産政塾」への参加「命令」であった。

人事曰く、「異業種交流があるので行って勉強してこい。ただし、自治体から参加するのは今回が初めてらしいので何をやるのかは知らんがな。」これが、塾への応募動機の真相であることは言うまでもない。もちろん、新しものの好きや勤務時間に堂々と職場を離れられる大義名分を与えられるという誘惑も手伝って「喜んで」参加させていただいた。

二 産政塾に参加して

失礼ではあるが、(財)中部産業・労働政策研究会のことは今回まで知らなかった。「産業」と「労働政策」といういかめしい名称から想像して、人事VS組合の構図の中で、政治談義、組合談義に花を咲かせ、ディベートに白熱する会合なのだろうと思って初会合に臨んだ。

予想どおり、人事と労働組合出身が半々、企画畑からは私だけ。しかも、弁のたつたものの揃いで、

ひと癖もふた癖もありそうな連中のようだ。これからどうなることやら…。

その後の活動は、インド楽器シタールの演奏とボランティア、足立顧問の海外体験談、松下政経塾への体験入塾、名古屋でのフィールドワーク（注…特にY氏には大切な会合であったはず。追記参照）、長良川河口堰とサツキマスの研究談を経て、最後に気の実践を行い、「気」を引き締めて終わるという事務局佐宗氏の絶妙な采配により進められ、会合や酒を汲み交わす回数を重ねる度に顔を覗かせるそれぞれの人間性……、当初の心配も杞憂に終わり、ほっとした。

活動の中で、その道で活躍する人々に出会い、いろいろな話を聞き、経験をさせていただいたが、私が活動の中で最も印象に残っているのは、松下政経塾への体験入塾である。

同世代の人が、自分とは比べものにならないくらい真剣に、信念と志を持ち、そして広い視野で、社会経済を見つめ、考え、真摯な姿勢で政治に取り組もうとする姿は非常に印象的であった。自分自身「それなり」には考えているつもりであったが、毎日の生活の中で「必死」に考えるということからはほど遠い生活に慣れてしまっている自分に気がついた。具体的には説明しにくいが、新鮮なショックを受けたことを覚えている。

同じ姿勢で生活することは到底できないだろうし、また真似をする必要もないだろうが、自修自得の気持ちを持ち続け、自分の足でしっかり歩き、時々、立ち止まって、自分自身について振り返って考えることも忘れずにおきたい。

三 ひとり言

ところで、この第七期産政塾約九か月の活動で、唯一、私が自慢(?)できることと言えば、七回の会合全てに参加したという「皆勤賞」である。しかし、ここで、断っておきたい。「お役所仕事」の公務員で暇だから参加できたのではない。

最近の地方自治体におけるカラ出張、官官接待問題など自治体の不祥事が新聞を賑わし、また「公務員は楽」という認識が罷り通っている状況では、説得力がないかもしれないが、公務員も楽ではないし、暇でもない。誤解のないように！

なぜ今、地方の時代と呼ばれ、地方分権が叫ばれるようになってきたのか、またいわゆるお役所仕事ではない地方自治の意味は何か……ということも、自治体職員のみならず市民(国民)も理解しなくてはならないと思うが、憲法や地方公務員法で規定される「全体の奉仕者として公共の利益のため」働くということは、現在のように、不透明な社会情勢の中では、企業と同じように大変なのである。

……ただここで「自治体の仕事も大変なんだ！」とは言いながら、松下政経塾で取り組む塾生の真剣さ、必死さに比べると声が小さくなってしまふ。もっと精進せねば！

四 雑感ひとつ

今年の夏は、例年どおりの猛暑であったが、夕立を一度も眼にした記憶がない。妙な夏だった。

そして、山村美紗、渥美清、藤子・F・不二雄、遠藤周作……が相次いで死去し、また、自分の周りでも七月末から九月の二か月で五回も死に遭遇しなくてはならない夏だった。

幸い私が喪主となるような事態ではなかったが、私の祖母、叔父、姉の義父、妻の祖父、隣家の長男というごく身近な死であった。年齢は四十四歳から九十四歳、死因は癌、クモ膜下出血、肺炎……というようにそれぞれ事情は異なるが、彼らの死に顔や彼らのことを話す家族の表情、会話……：日常とは異なる雰囲気の中で、なぜだか、自分の寿命や時間のことが頭に浮かんた。

いずれは人間は死ぬ。世界一の長寿である日本人の平均寿命からすれば、産政塾に参加し、若手と呼ばれる我々も四十余年もすれば死ぬであろう。仮にあと四十五年生きるとして、一六四二五日、三九万四二〇〇時間、二三六五万二〇〇〇分、一四億一九一二万秒である。この時間が長いのか、短いのかは実感はないが、具体的に数字に換算してみると非常に限られた時間のような気がする。

余談だが、「人間に限らず、ネズミでもゾウでも身体の大小に関係なく、全ての哺乳類の心臓の拍動は約五億回で、心臓の鼓動という時間からすれば、『生き切った』感覚は大差ないと言える……。」ということを読んだことがある。仮に全ての生物が「心臓の鼓動」という時間を平等に与えられているとすれば、人間が人間たる意味のひとつは、同じ時間の中で、思考し、感じ、個々人の価値観で行動しながら、そうしたプロセスの結果として普遍的な価値や新たなモノを生み出すことができることであると思う。

この平等に与えられた時間の中で、これから自分自身どう生き、どう感じていくのかは、まだわからない。結果としてどうなるのかもわからない。しかし、物事には、結果とプロセスの両方が重要な

要素なのである。だからこそ、自分の視野を自ら狭くすることなく、いろいろなことを見つめ、考え、行動するというプロセスを大切に、そして楽しみながら、自修自得で自ら成長しようとする努力だけは続けていきたいものである。

四 最後

長々ととりとめもないことを述べてしまったが、この産政塾に出会ってからの九か月は、自分なりに考え、楽しんできた。そして、様々な業種、企業、組合の同期の仲間たちに出会え、就職後十年を経てサビついた自分の頭の中をリフレッシュできたと思っている。

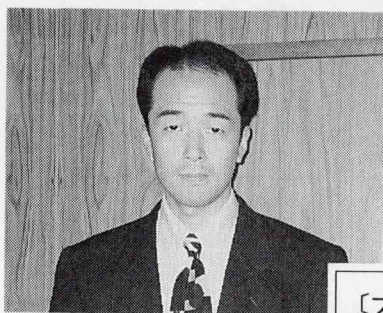
産政塾事務局の佐宗氏をはじめ第七期同期の方々、そして中部産政研の皆様方に感謝して筆を置きたい。ありがとうございました。そして、同期の仲間、産政塾にこれからも幸多からんことを！

● 追記

活動中、最初の出会いの場で最長老K氏の妨害を受けたにもかかわらず、速攻で人生の伴侶の獲得に成功するという第七期最大の実績を挙げられたY氏にMVPを与えたい。

民法第七三九条、第七四〇条及び戸籍法第七四条の規定に基づく法的な効力の発生は来年とのことだが、まずは、皆さん、祝福を！ 万歳！バンザイ！

人生について思う



㈱デンソー 人事部

村瀬 俊

〔プロフィール〕

- | | |
|---------|--------------|
| むらせ | しゅん (31歳) |
| • 1965年 | 愛知県名古屋市生まれ |
| • 1988年 | 日本電装㈱入社 |
| | (現 株式会社デンソー) |
| | 人事部企画にて給与を担当 |
| | 現在に至る |
| 〈家族〉 | 妻 |
| 〈趣味〉 | ゴルフ、テニス、スキー |

はじめに

今回、この産政塾において、様々な方面で活動されている講師の方々と接し、また塾生として、同世代の仲間と知り合えたことは、私にとって貴重な経験であった。最後は、この論文で終了とのこと、物書きが不慣れな私であるだけに、これも、この塾から得た貴重な経験であると、自分自身に言い聞かせ、ペンを進めることにする。

一 社会人として日々の生活を送っている私が、この塾でお招きした、個性溢れる講師の方々の考え方に触れ、今感じることといえば、人の情熱と生き方についてである。情熱といえば、今も私の心に強く残っているひとつの思い出がある。まずはその思い出を紹介することから始めたい。

ロードレーサー

十四く十五才の頃、私はあることに熱中していた。それは自転車である。この極めてポピュラーかつシンブルな乗り物に、私はのめり込んでいた。しかし、ここでいう自転車とは、買い物や通学に便利なチョイ乗り用のそれとは違い、速く走るためだけに、すべての無駄を削ぎ落とした、いわゆるロードレーサーと称される自転車のことである。

当時、私と同じように、ロードレーサーに魅せられた者は四人程いて、活動はこの仲間で行った。「活動」とは、競技ではなく、平たく言えばサイクリングである。とはいっても、自分達の足で、しかも限られた時間内に、どこまで遠くに行くことができるかという、挑戦めいたものであった。

目標として決めたルートを完走するために、私達はあらゆる工夫をした。ひとつは、走法に関してである。風の抵抗を最小限に抑えるために、前走者に限りなく近づき、全員がひとつの移動体となって走るのである。無論、先頭を引っ張る者は抵抗を一身に受け、疲労が激しいため、定期的に交替し、メンバー全員の体力の減少を均等に保つといった具合である。最初のうちは、前輪が、前走者の後輪と接触して転倒したり、先頭のペースが不安定で編隊が崩れたり、狙った効果をあげるには程遠い状態であったが、経験を重ねるうちに、まとまりが出てきはじめた。実際に、この走法は効果的で、編隊の中にいる場合、多少の登り坂でも、前走者に吸い込まれていくように走行することができたのである。

また、自転車そのものについても、独自のアイデアや工夫を盛り込んだ。ロードレーサーの総重量は、当時約一〇キログラム足らずで、その気になれば小指一本で持ち上げられるほど軽いものであった。しかし、さらなる軽量化のために、パーツの肉抜き加工をしたり、照明についても、夜中に先頭を引っ張る者数人には照度が高い装備を、その他の者には車輪の抵抗にまったく関係のない電池式の照明をつけ、体力の減少を最小限に抑える工夫をした。もちろん、このようなアイデアは皆で出しあい、加工や取り付けに至るまで、すべて自らで行った。

さらに、成功のカギを握る持久力を養うためのトレーニングは、個人がメンバー全体の持久力と比較した上で、独自に行っていた。しかし、メンバーの多くは私を含め、水泳部やサッカー部の部員であり、毎日夜遅くまで練習をしていたので、体力にはかなり自信があった。それでも私は、当日に向けベストなコンディションをつくるため、今考えるところがあるのかどうかも疑わしいが、ランニン

グやなわとびをしていた。とにかく、当日へ思いをはせると、何かをし続けなければならなかったのだ。

その結果、中学生のプライベートな自転車集団としては、かなりハードな行程を走破することができようになった。例えば、山岳ルートでも一日二〇〇キロメートル以上は走破することができたのである。

長々と思い出話を続けてしまったが、この頃のことを私の心に深く刻まれているのは、やはり心の底から物事に熱中していたからだと思う。ほどほどではなく、たとえつらくても自分が納得できるところまでこだわっていたからこそ、十五年以上たった今でも、鮮明に私の脳裏によみがえるのではないだろうか。ただ好きで始めた自転車ではあったが、実際に一日中こぎ続けていると、完走し終わる頃にはへとへとに疲れてしまう。「二度とこんなつらいことはやるものか」と毎回思うのだが、しばらくすると、さらに遠いところへ挑戦したくなる。まるで、ここまですご自分の限界だと認めたくないもうひとりの自分が、さらなる目標へと向かわせるかのように、無償に走りたくなくなってしまっている。とにかく、自分が生きていることを強く実感していたことは確かだ。

しかし、今の自分はどうか。何事もほどほどで、自分をごまかしてはいないだろうか。これまでの人生三十年間のちょうど半ば頃の出来事を思い返しながら、ふとそんなことを考えてしまうのである。

イーチューライダー

最近よく耳にする曲のサビに、こんなフレーズがある。

「僕らは自由を 僕らは青春を 気持ちのよい汗を 決して枯れない涙を

幅広い心を くだらないアイデアを 軽く笑えるユーモアを うまくやりぬく賢さを

眠らない体を すべて欲しがる欲望を 大げさに言うのならばきつとそういうことなんだろう」

これは元ユニコーンというバンドのボーカルで、今はソロ活動をしている奥田民生の「イージーライダー」という曲である。イージーとは（芸能）業界言葉で三十（才）を意味し、アメリカカンバイクの映画タイトルでもある「イージーライダー」をもじって名付けられたものであろう。歌詞のこの部分が云々と言った感想があるわけではないが、同世代の心境を唄ったものだという先入観もあって、なんとなく私の気持ちに響いてくるのである。

三十才といえど、会社生活にもとくに慣れ、組織の仕組みを学び、その組織への帰属感を良くも悪くも増大させていく頃なのではないかと思う。社会人となってから、これまで職業としては、ひとつの組織に属し、毎日を過ごしてきた私であるがゆえに、これはある意味ではごく自然な感覚なのかもしれない。ただし、この日常にただ漫然とし、時間に追われるままに、与えられた仕事をこなすだけの日々を過ごしてしまうようなことになれば、本来感じるべきはずの、生きている喜びや悲しみや感動を、どこかに置き忘れてきてしまうことになるのではないかと思う。

「組織人である前に、ひとりの人間であることの大切さ」。私がこの曲を聞いて何かを感じたわけはそんなところにあったのかもしれない。

これから

現在の私の日常を振り返ると、仕事には自分なりに取り組み、また趣味にも、それなりにこだわって、気のおけない友人たちと、いろいろなことを楽しんでいる。しかし、そこには漫然として、燃焼しきれていない自分が見え隠れするのである。そこで、産政塾第七期生として入塾したこの時期を転機ととらえ、これからの生き方について考えたい。

私は、まず何事も「自分としてはこうありたい」と思う方向をしっかり持って行動していきたい。この気持ちがあるからこそ、打ち込む情熱や、達成したときの感動が生まれると思うからである。そして、世間ではなく、自分自身に誇れる生き方をしていきたい。そのためには、旺盛な好奇心と、広い視野で、常に自分の価値観を養うことが肝要である。ひとりよがりでは、無意味どころか、はた迷惑なだけである。また、ときに苦境に陥ったら「人生、生きているだけでまるもうけ」と聞き直る余裕も大切なことだと思う。まだまだ未熟な私ではあるが、これからの人生、ロードレーサーのペダルを踏み込むように、自分の力を信じて着実に、また、大陸を横断するバイクのように力強く、走り続けていきたいと思う。

第七期生の皆さん、ならびに事務局の方々には、心から感謝を申し上げ、これからもさらに交流を図っていただくことをお願いしまして、最後したいと思います。どうもありがとうございました。

ベトナムへの旅



豊田合成労働組合

河 路 直 人

〔プロフィール〕

かわじ なおひと（33歳）

- 1963年 愛知県生まれ
- 1987年 豊田合成㈱入社
- 1994年 豊田合成労働組合出向
現在に至る

〈家族〉 妻

〈趣味〉 スキー

〈好きな言葉〉 棚からぼた餅

遠い記憶の中で―

私が、ベトナムという国に関心を持ったのは、たしか小学校四・五年の時、ベトナム戦争の写真集を見てからだと思う。左手に銃を持ち、右手にはベトナム男性の生首をぶら下げ、茫然と立ち尽くすアメリカ軍の兵士。まだあどけない顔をした、当時の私より少し年上のベトナム人少女が塹壕から身をのりだし銃を構えている姿。小学校の図書館で見たこの写真集は、当時の私に大変なショックを与えた。「日本で戦争が起きたら自分は、そして、家族はどうなるのだろうか」子供ながらに、いや、子供だったからこそ、戦争を遠い国のことでなく身近な出来事として、私は考えていたような気がする。

ベトナムへの思い―

それから十数年が経ち、記憶の片隅に押しやられていたベトナム戦争を思い出させる「地獄の黙示録」や「プラトーン」といった、極限状態に於ける人間の心理を描いた映画が何本か上映された。また、バブルの頃だったと思うが、あふれんばかりの難民を乗せた木造船が日本を目指し次々に漂着した。大きな危険を冒し、年収の何倍もの渡航費用を払い、日本へ密入国しようとするベトナムの人々を見て「本当に日本は黄金の国ジパングなのだろうか」と思った。自分を含め、当時の、そして今でも多くの日本の若者は、生まれた時から物質的には豊かな環境であり、今の自分の暮らしが黄金の国ジパングといえるほど「ゆたか」であると実感してはいない。

子供の頃の記憶・戦争映画・木造船に乗った人々に刺激され「ベトナムの今を見てみたい」と以前

から漠然と思っていた。今年に入り、妻にベトナム旅行の提案をしたところ、当然(?)のことがら、最初はあまりのり気ではなかったが「本場のベトナム料理は美味いらしい」という、たいして根拠のない理由で何とか妻を説得することができ、晴れてこの夏休みを利用し夫婦でベトナムのサイゴンを旅することになった。

(注) サイゴンはベトナム最大の商業都市で、一九七五年の解放後は「ホーチミン」と呼ばれるが、住民をはじめ多くの人々はいまだ「サイゴン」と呼んでいる。

サイゴンへの第一歩

タイのバンコク経由でサイゴン・タンソンニャット空港に降り立ち、入国審査のある古びた空港ビルに入ると「ちょっと違うぞ」という雰囲気が漂っていた。建物の中には余分な広告やディスプレイがなく、華やかさもない、国際空港にあるまじき雰囲気なのである。そう、この国はやはり社会主義国家である。入国審査を通過し、税関へと進むと、普通は出国時に実施されるX線による手荷物検査がここベトナムでは入国時にも行われている。税金徴収の対象となる高額機器や、思想や風紀を乱すおそれのある文化の輸入には厳しいらしい。

しかし、この厳格な、そして閉鎖的で暗い社会主義国家のイメージは空港ビルを出た途端に払拭されてしまった。帰国した家族の名を大声で呼ぶ人、タクシーの客引き、その数の多さと興奮の度合いは東南アジアの喧騒と活気にあふれる光景だった。そして、市の中心街に向かうタクシーの中で驚き、そして何故か笑ってしまった。道路にあとからあとからバイクが湧き出てくるのである。右側通行だ

けはかろうじて守っているようだが、無秩序で、自由奔放に走り回っているとしか思えない、凄まじい数のバイク。話には聞いていたが、これはすごい。

サイゴン道路事情―

モーターゼーションが遅れている国はいずれも同じだが、まず、信号というものがサイゴンには非常に少ない。また、バイクが進路変更する際にウインカーを点滅させることもあまりない。とにかく少しのスキさえあれば「すつ」と間に割り込み、流れに乗ることができればいいらしい。当然、割り込まれた方は少なからず驚いてクラクションを鳴らすのが、特別に怒った様子もなく、また、割り込んだ方も悪びれる様子もなく、そこには暗黙の交通ルールがあり、お互いさまのようだ。しかし、この状況に不慣れな旅行者にとってみれば命がけで道路を渡ることになる。無数のバイクが縦横無尽に走る道路の向こう側へたどり着くまでの間、我が身は完全に「あなた任せ」になる。バイクが自分を避けて走り去ってくれることを他力本願で祈りながら横断する。もちろん現地の人と同じであることは違いないが、たいして気にする様子もなく、スイスイ横切って歩いている。「慣れ」や「日常」というものには関心してしまった。

夕方から夜ともなると、家族全員が一台のバイクに乗って走っている光景をよく目にする。父が運転し、子供を背負った母が後ろに座り、父と母の間に子供が座り、父の足元の泥よけの前にもう一人さらに子供が乗るという、夜逃げ状態のバイクまで走っている。これは現地の人に聞いたことだが、バイクを移動するための手段・乗り物とだけ解釈するのは間違っているらしい。特に夕方から夜にか

けて走っているバイクは家族の移動する「お茶の間」と考えた方が正しく、夜でも蒸し暑いサイゴンでは「家に居るより、バイクで走っているほうが涼しい」という理由で、多くのバイクはただひたすら走っている、いわば「夕涼みバイク」である。

悪名高き「シクロ」――

サイゴンには「シクロ」と呼ばれる前輪に車輪が二つ付いた三輪自転車タクシーが庶民の足となっている。しかしこのシクロ、観光客にとっては悪名高き乗り物である。ガイドブックには「必ずぼられる、絶対乗るな」と紹介されている。運転手は街のあちらこちらに仲間でたむろして、観光客と見れば「どこ行く？ シクロ？」としつこく声をかけてくる。

あまりのしつこさと、それを振り払うことにいささか疲れ気味だったこと、それに少しの好奇心から一度乗ってみることにした。一度乗ってみると、こんなに便利な乗り物はない。しかし、二度・三度利用しているうちに、ついに怖い目に遇ってしまった。目的地に着くと、乗車前の言い値の一〇倍の料金を運転手は請求してきたのである。最初は我が耳を疑い、乗車前に交渉した料金を手渡したが、相手の顔がこわばり、次第に語調が荒くなってきた。金額にすれば四千円程度であるが、観光客と知り不当な料金を請求することに腹が立った。「日本男児、こんなことで負けてたまるか」とばかりに、最初はつたない英語で言い返していたが、気がつくやうに、どこからともなくシクロ仲間が集まってきて周りを取り囲まれてしまっていた。「これはヤバイことになった。万事休すか」と思った時、運良くスコールが降りはじめた。正に恵みの雨である。「客が座る座席がずぶ濡れになっては、今日の商売あ

がったり」と言わんばかりに、それまで周りを取り囲んでいたシクロ仲間がそれぞれの客用座席にシートを被せはじめた。私は「今しかない」と久しぶりに全力疾走で後ろも振り返らず走って逃げた。その後、現地で会った日本人に聞いた話では「シクロの運転手の連中に薄暗い部屋に連れ込まれたうえ、ピストルを突きつけられ、身ぐるみ剥がされた旅行者もいる」とのこと。全てのシクロが悪質ではないにしろ、改めて日本の治安の良さを実感した。

ベトナム女性―

ベトナムは南北に細長く多民族国家である。しかし、顔は日本人に似ているためか、なんとなく親しみがわく。おまけに女性には美人が多い。短期間の滞在で、一都市しか知らない旅行者があたかもそう言い切ってしまうのはばかられるが「日本人好みの美人が多い」そう断言してしまっても誤りではないと思う。私達が滞在していたゲストハウスも、しっかり者の美人姉妹が宿をきりもりしていた。また、ベトナムとって忘れてはならないのが「アオザイ」である。アオザイは、サイドにスリットの入った膝下までのチャイナドレスの下にパンタロンのようなズボンを身につけたベトナム女性の民族衣装であるが、一般に普段着として着ることはなく、晴れ着としてパーティや結婚式などに着ていくようだ。度々アオザイ女性を見かけたが、旅行者はレストランや土産物・空港・学校などのユニホームとして着用している場合を目にすることが多い。

長い戦争で男性が戦地へ赴き、女性が家庭や社会を支えなければならなかったからだろうか、それとも元々の国民性なのか、ベトナム社会における女性の役割は大きいといわれる。郵便局や銀行商店

はもちろん田畑での農作業など、多くの場所で女性の活躍している姿を見かけた。

ベトナム経済の謎―

ベトナムの通貨は「ドン」と言い、一USドル＝一〇〇〇ドンである。（九六年八月現在）

ノートが一〇〇〇ドン、コーヒー一杯が四五〇〇ドン、食堂のうどんも六〇〇〇ドン程度で食べることが出来る。現地の人が利用する食堂で飲み食いし、一般商店で買い物をする分には、サイゴンの物価を日本の物価と比較すると、おおよそ一〇分の一であると感じた。

しかし、一方で腑に落ちないことはベトナム人の平均月収とこの物価との差である。公式的には、ベトナム人の平均月収はわずか四〇USドルと言われている。確かにサイゴンはベトナム国内では物価が高い都市であり、急激な経済成長を遂げていることも事実である。しかし、その分を差し引いても納得できるものではない。ましてや、あの溢れんばかりのバイクは三〇〇〇USドルもするという月収の一〇〇倍もするバイクが無数に走るサイゴンの街の様子はベトナム経済最大の謎である。

これは私の個人的な考えであるが、この公式的な平均月収といったものが少なからずサバをよんだ数字ではないのだろうか。国の内外に対して、ベトナムの貧しさをアピールしているのかもしれない。事実、街の商店で土産物を買う際、いつものように言い値の半値から値切り交渉をスタートしたら「私の国ベトナムは、あなたの国日本に比べて貧しいのです。とてもそんな安い値段では売れることはできません。」と言われてしまった。

走り続けるその先は―

昔ながらのすげ笠をかぶり露店で果物を売のおばさん。素足のまま天秤棒を担いでココナッツを売る少年。赤ちゃんを抱いて物乞いをする女の人。道端で座り込んで飲み食いする人々。街を見る限り裕福な人ばかりではない。しかし、店の中にはコピーマシンやパソコンがあり、携帯電話や日本製の新車を持つ人も中にはいる。高層ホテルの近くには朽ちて今にも崩れ落ちそうな年代物のアパートが建っている。今、ベトナムは、戦争で失ったものの、遅れてしまったものを取り戻すかのように、ものすごいスピードで走り続け、変化している。

ベトナム人の年収に近い大金をわずか一週間の間に使っていく日本人のツーリスト達を見て、彼らはどう思っているのだろうか。確かに、購買力平価だけを比較すれば、ベトナムにとっての日本は、「黄金の国」と言えるかもしれない。物質的に「ゆたか」である近代化こそ正しいと信じ込み、このまま突き進むつもりだろうか。家族揃って夕食を食べることなど稀となってしまう日本と、家族総出で夕涼みバイクを楽しむベトナムとどちらが、「ゆたか」なのだろうか。短い期間ではあったが、ベトナムのこの先や今の自分達の生活について考えさせられた旅行となった。

最後となりましたが、楽しく良い経験をさせていただきました事務局の佐宗さん、産政塾生の皆さん、ありがとうございました。またお会いできる日を楽しみにしています。

半生の棚卸し



全トヨタ労連

小林 雅 昭

〔プロフィール〕

こばやし まさあき (39歳)

- 1957年 愛知県蒲郡市生まれ
- 1980年 豊田鉄工㈱ 入社
- 1990年 豊田鉄工労働組合へ出向
4年間の専従を経て
- 1994年 全トヨタ労連
現在に至る

〈家族〉 妻 (由加里)、長女 (加奈)、次女 (美緒)、長男 (篤史)

〈モットー〉「感謝の心」を忘れない

●はじめに

昨年の十二月に始まった産政塾も、あつという間に閉塾の時期になってしまった。すなわち待ちに待った(?) レポートの提出時期がきてしまったということである。テーマは自由であるが、よくよく考えるとこれほどむずかしいこともない。かえってテーマを決められたほうがどれだけ絞り易いか、これといった趣味もなく、特技も持ち合わせていない自分自身をあらためて自覚した。とはいふものの、レポートは書かなければならない。考えに考え抜いた結果、間もなく四十歳という人生の折り返し点を迎える今(一般に言われる人生八十年からして)、これまでの半生を棚卸してみたい。

この三十九年間を顧みるに、大きな転機・節目となる出来事がいくつもあった。幼・少年時代は、記憶も定かではなく、とりたてて転機といえるようなことは思いつかない。やはり、学校を卒業し社会に出たこと、人並みに結婚したこと、子宝に恵まれたことがずっと頭に浮かぶ。もっと言えば、これに加え労働組合に出向したこと、さらには上部団体(全トヨタ労連)に派遣されたこと等が思い返される。

●社会に出たこと

自分は昭和五十五年、豊田鉄工㈱に入社した。自宅が蒲郡市で勤務地が豊田市であったため、通勤できない程ではなかったが、寮に入ることにし

た。社会に出たこともあるが、それまで親元から離れたことのない自分が、初めて独り立ち（？）したことがそれからの自分にとって大きな転機になったように思う。

●人並みに結婚したこと

自分は二十六歳で結婚した。

この時初めて縁というものを実感した。というのも、自分でも信じられないが、女房は自分の幼なじみだったのだ。保育園から中学校まで十一年間ずっと机を並べてきた彼女がまさか自分の一生の伴侶となるとは……。そのいきさつを少し触れさせて頂きたい。二人が九年ぶりに再会したのは、何と友人の結婚式。自分は新郎の友人として、彼女は新婦の同僚として出席しており、どちらからともなく遠い昔の思い出話に花が咲き、それがきっかけでお付き合いが始まり、気がつくとお互い結婚を意識していた。まさに、赤い糸を地でいく形となってしまったわけである。それから早いもので十三年が過ぎようとしている。今の自分があるのも、女房があるのもあの結婚式があったからこそ。良かったか悪かったか。彼女がどう思っているのか定かではないが、少なくとも自分は（言葉に出しては言えないが）感謝をしている。

●子宝に恵まれたこと

自分には三人の子供がいる。

小学校六年の女の子、小学校三年の女の子、そして小学校一年の男の子である。ほぼ望み通りに子

供を持てた。まさに子宝に恵まれたことに感謝している。最初の子供が生まれた時の感激は今でも忘れられない。もちろん二人目、三人目の時も感激したことは言うまでもないが。

分娩室に入った女房を待つ時間の長さ。あの期待と不安の入り交じった気持ち。そして、産声の聞こえた時の何とも言えない安堵感。感謝、感謝……。

●労働組合に出向したこと

自分は平成二年に労働組合に出向した。

それまで労働組合とはおよそ縁もゆかりもなかった（少なくともその時はそう思っていた）自分が何故？ 白羽の矢といってしまえばそれまでだが、全く未知の世界へ入ることへの抵抗は強かった。

それも専従という形で。

しかし、組織の中での個人の抵抗には限界があった。四年という口約束を信じて、いざ労働界へ飛び込んだ。六年経った今もその労働界の真っ只中にいるが、今は組合へ出してもらったことを感謝している。というのも、それまで入社してから十年間は会社という世界しか知らなかった自分が、会社に籍を置きながら、外から見る目ができただからである。個人的にも、組合間の交流を通じて人のつながりが広がり、それまで知らなかった世界を知ることができたからである。

さらに四年後、上部団体に派遣され、現在二年が経過したわけだが、まだまだその輪は広がっている。この無形の財産を大事にしたい。

●産政塾に参加したこと

自分は産政塾に参加した。

この冊子の巻頭をみて頂きたい。「この編は、三十歳前後の前途有為な若者が溢れる心の叫びを綴ったものである」と書いてあるはずである。最初の会合で名簿を見て驚いた。確かに自分は前途有為な若者ではあるが、三十歳前後ではない。一世代違うのである。しかし、会合を重ねる度にそんな感覚は払拭された。会合を通じての議論の場はもちろん、その後の懇親の場でも、クダを巻く自分に温かく接してくれたメンバーのみなさんに感謝。

また、業種が違う方々と酒を酌み交わし、時には講師の方を交えて率直にものが言えるのもこの産政塾ならではのこと。産政塾始まって以来とのことだが、この七期目の塾を通じて一生の伴侶を得てしまうのも産政塾ならではのこと。(吉田君 お幸せに！)

いろいろなエピソードがあるが、本当に楽しく、有意義に産政塾に参加させて頂いた。梅村前理事長の思いのこもった産政塾が今の性格を失うことなく、これからも発展されることを心から祈りたい。(エピソード追加)

二回目の会合だったと思う。アイシンさんの悠々館(治部坂)で会合をした時。往路の途中、ちょうど愛知県と長野県の県境で自分の車がネズミ捕りにかかり、同乗していたメンバーがワリカンで罰金を。感謝・・・。

●おわりに

今は九月の下旬。

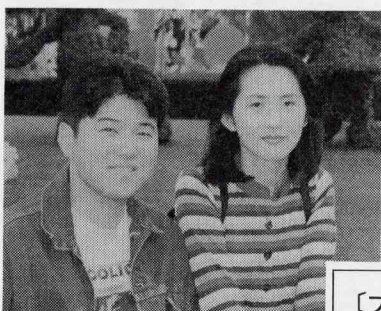
少し前まで、暑くて眠れない日々が続いたように思うがめっきり秋らしくなり、夜ともなつて外を歩くとヒンヤリする。時の経つのが本当に早く感じられる。おそらく歳をとる程この感覚は加速するのだろう。

自分の友人で、十歳毎に新たなテーマをもつてことに取り組んでいる人がいる。自分より年上だが、その人は三十歳でサーフィンを始め、四十歳で社交ダンスを始め、現在講師の免許を取得するのだと頑張っている。五十歳で何をするのか聞いたらピアノでも始めようかとのこと。

自分も来年四十歳。とんでもない半生の棚卸しになってしまったが、今回産政塾に参加させて頂いて、講師の方々に共通して感じたのは、一つの事に信念をもち、やり続けていること。どうしてこんなことを、と思うこともあったがそのひたむきさに心を打たれた。自分も何か始める。そしてやり続ける。

十年後、自分はこれをやったんだともしっかりした棚卸しができるよう何かを始める！
第七期の産政塾塾生のみなさん、講師の先生方、事務局の佐宗さんありがとうございました。

扇 の 要



松坂屋労働組合 中央執行委員

臼 井 満

〔プロフィール〕

うすい みつる (27歳)

- 1969年 京都府生まれ (愛知県育ち)
- 1992年 ㈱松坂屋入社 名古屋店
和洋菓子売場に配属
- 1994年 松坂屋労働組合名古屋支部
書記次長 (専従)
- 1996年 松坂屋労働組合中央執行委員
(専従)

現在に至る

〈家族〉 妻

〈趣味〉 スキー、オートキャンプ、野球

〈モットー〉 冷静沈着

「さて、臼井は、どのような球種を要求し、攻めてくるのか、サインの交換です。」

“ここは、アウトコースの変化球で様子を見るか、いや待てよ、まだバットを長く持っている。ここはズバツとインコースへ真っすぐに勝負だ!”

「ピッチャーは大きくうなずきました。さて、サインの交換も終わり、ピッチャー、セツトポジションより、第六球目を投げました。」

「カキーン いい当たりの打球が左中間へ、のびる、のびる センター・レフトともに追いますが追い付きません。打球は左中間真つ二つ、見事な逆転タイムリーツーベースヒットです。」

“やられた、裏の裏をかかれた。くっそ!”

捕手・野球のキャッチャー、九人守備につくうち一人だけファールグラウンドに定位置があり、打者の後方にいる。また、グラウンドを扇に例えて、“扇の要”とも呼ばれる。

私は、小学校三年生から大学四年生までの十四年間、野球部に所属し、白いボールを追いかけてきました。そして、中学校一年生からの十年間は、キャッチャー（以下捕手）としてプレーしてきました。この十年間の経験は、何ものにも変えがたい貴重な経験であったとともに、私の青春そのものでした。

そこで、社会人五年生となった今、産政塾を卒業するに当たり、「本当に野球をやっていて良かった。」

た。また、捕手をやって良かった」と言う強い思いと、捕手を通して学んだことを綴り卒業論文にかけたいと思います。

『リズム』

野球の試合中には、いろいろなリズムが隠されています。攻撃のリズム、一打席中のリズム、守備のリズム、初回のリズム、最終回のリズム、こうしたリズムを多く掴み、自分の見方にした方が勝者です。

捕手は、守備のリズムの指揮者的存在です。ピッチャーへ送るサインひとつで、どのような展開にもできるわけです。しかし、基となるリズムをしっかり理解していないと、試合を壊してしまいます。捕手は、この基となるリズムを正確に掴み、時には大胆に、時には慎重にタクトを振らなければなりません。

私も、一生懸命、タクトを振ってきたつもりですが、当時のチームメイトはどう思っていたのか？ リズムを掴むということは、仕事の中でも、日常生活の中でも、生かされています。力の強いリズムに振り回されることなく、自分の信じたリズムを大切にしていきたいと思う、今日この頃です。

『駆け引き』

投手にサインを出す中で、一番厄介なのが、打者との駆け引きです。当然打者もヤマを張っているわけですから、裏の裏をついていかなければなりません。アウトカウント、走者、点差、バットの握り方、グリップの位置、スタンスの位置、前打者との絡み、前打席との絡み、イニング数等々さまざまな観点からその打者を観察し、攻めていくわけです。（余談ですが、初めて対戦するチームの場合は、ユニホームの着こなし方、スパイクの手入れの仕方なども参考にしました）

単調にならないよう打者を上下・左右にと揺さ振り、こちらのペースに持っていかれば打ち取ることができます。

また、打者との駆け引き以外に相手ベンチとの駆け引きも存在します。有利な状態に持ち込むためには、その時の打者を早めに追い込み、相手の攻撃のパターン（ヒットエンドラン、送りバント、盗塁など）を少なくさせることがポイントとなります。

このように、駆け引きでは、自然体・冷静な判断力が必要とされます。捕手はどんな状態（ピンチ）でも冷静でなければなりません。捕手を通じて自然体・冷静が如何に大切かを何度も思い知りました。

『間』

一つの「間」が試合の流れを大きく左右することがあります。

捕手はこの「間」に対し、非常に気を使います。投手は、テンポ良くすいすい投げるタイプと、一球一球にゆっくりと間合いを取って丁寧に投げるタイプに分かれます。捕手はその日の投手の動きを素早く見極め、違和感なく投げるができる「間」を提供しなければなりません。一球一球の「間」の取り方、ピンチの時の「間」の取り方など、捕手は常に「間」を意識していなければなりません。

また、ピンチの時などは、打者を集中させないためにも「間」を上手に使うことが要求されます。プロ野球のテレビ中継を見てもよく見られる光景です。例えば、投手がプレートを外したり、捕手がタイムをかけてマウンドへ行くなど。

このように捕手には、素早い状況判断と臨機応変な対応が必要です。また、投手のことを思いやり、投手の立場にたって物事を考えることも重要となります。

『扇の要』

ホームベースは、ダイヤモンドにある最後のベースです。この最後の砦を守っているのが捕手です。おそらく守備についている九人の中で、一番責任が重いポジションでしょう。時には体を張って守り、

時には頭をフルに回転させて守り、常に集中し、相手を観察していなければなりません。相手に点を与えないために、どう防ぐのか、常に頭と体で守るわけです。

捕手は、扇の要です。グラウンドにいる九人をしっかりと一つの束にまとめ、守りの指揮官としてグラウンドに立ちます。

今でも店の休業日などに、サンサンときらめく太陽の下、芝生の緑に囲まれた中で、草野球をして汗を流すことがあります。やはり野球をしていると、仕事のことや、嫌なことなど、全てのことを忘れて心身ともリフレッシュできます。今後も体の動く限り、こうした時間を大切にしていきたいと思っています。

『産政塾に参加して』

特に印象に残っているのは、「松下政経塾への一日体験入学」です。早朝の湘南海岸へのランニングをはじめ、見るもの、やることすべてが新鮮でした。

また、塾主・松下幸之助という人物の偉大さを再認識し、ほぼ同年代の人が真剣に政治家を目指したり、何か一つのことを研究している姿には、忘れかけていた大切な気持ちを呼び戻してもらったような気がしました。今後仕事を進める上でも、また生活していく上でも胸に深く刻んでおきたいと思

います。

加えて、第五回会合でのフィールドワークでは、まるで子供の頃に戻ったかのように好奇心旺盛となり、町の中のユニークなものを再発見できたことは、とても新鮮な感じがしました。今でも強く印象に残っています。

『おわりに』

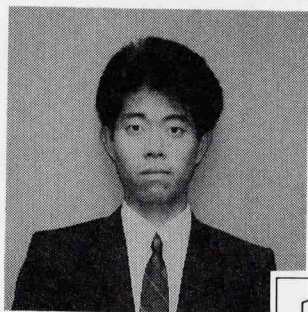
トヨタ車体の吉田さん、おめでとうございます。まさに超電撃婚約でした。あの日のことは良く覚えていますよ。当労組の事務所で第五回の産政塾の会合をして本当に良かったと思っています。（吉田さんは、当労組の美人専従書記の伊藤さんと平成九年一月十一日にめでたく結婚します）

この出来事は、産政塾第七期生全員の思い出として心に残ることでしょう。お幸せに。

伊藤さん、名前が吉田さんになっても私の席の隣で、私を助けて下さいね。よろしく願います。

以 上

これからの時代に生きる



中部電力（株）人事部

星 野 悟

〔プロフィール〕

ほしの さとる（30歳）

- 1965年 愛知県名古屋市生まれ
- 1989年 中部電力（株）入社
岐阜支店大垣営業所営業課配属
- 1991年 名古屋支店総務部人事課
- 1994年 本店人事部安全・厚生課
現在に至る

〈家族〉 妻・長女（1歳）

〈趣味〉 ドライブ・旅行・ゴルフ・スキー・
映画鑑賞・釣り
格闘技…昔実践、今観戦（特にK1）

昨今ほど、将来予測の困難な時代もないように思う。

経済情勢をみれば、急激な円高の一巡、景気の低迷、諸物価の長期低落傾向など、先行き動向は今なお不透明なものが多く、政治にあっても、政党政治のあり方が問われるような事態が起こっている。リゾート開発をはじめ、国内外の不動産関連投資の低迷、地価、株価の下落などは狂乱時代の後遺症として回復の見通しもない。

また、高齢化社会の到来により、勤労世代への年金や医療費負担が増加するほか、企業の成長を前提としてきた終身雇用、年功賃金の崩壊による雇用構造の変革も進んでいる。

このように枚挙に暇がなく、いかにも厳しい状況ばかりが待ち受けているようであるが、いずれにせよ、これからはしっかりと自己を確立することが必要な時代になってきたことは間違いない。そのためには、さまざまなリスク管理も自己責任原則のうえで重要な要素となる。

〈リスクの認識〉

現代社会においては、さまざまなリスクがつきまとう。健康をはじめ、事故、災害、雇用、投資、情報化や環境に関わる危機管理が必要となってくる。

一、健康

新たな国際伝染病がクローズアップされる一方で、医学の進歩によって、個々人の能動的意思により、予防のほか早期発見・早期治療が可能となり、生存率も高まっている。

しかし、その結果、高齢者を中心に医療行為への依存度が増し、健康保険制度は財政悪化の一途をたどっている。

寿命が伸びたことから、必然的に一人では生活できない人の割合が増え、介護という概念が表面化するや否や急速にその必要性が高まり、新たに介護保険制度が二〇〇〇年の導入を目指し、法制化へ向けて検討が重ねられている状況である。

二、事 故

交通事故などは、だれにでもその機会性があり、一瞬のうちに生活は暗転してしまう最たるものである。昨今では、各メーカーが安全装備の充実を競っているが、逆に安全性を過信した運転に繋がるものが懸念される。動力性能も格段に進歩していることはすなわち、速度が出ることにより事故の程度が大きくなるともいえる。安全装備は事故を未然に防ぐためのものではない。ITS (Intelligent Transport Systems) 構想の一端を担う先進安全自動車 (ATS) 開発には既存の法制面での整備などが必要で、年間一万人にものぼる交通死亡者対策は運転者のモラルの向上が最重要項目である。

三、災 害

建築物、人口が密集する大都市は、その構造が複雑であるが故に、意外なよろさをはらんでいる。大地震が起こった際の被害の大きさは、兵庫県南部地震で記憶に新しいところであり、人的被害にとどまらず、建物の崩壊、道路の分断、交通機関の麻痺等から、ライフラインの機能不全、経済活動の

阻害にまで及び、復興への道のりも平坦ではない。地震に限らず、危機管理能力の強化を必要とする事象は広範囲に想定される。

四、雇 用

資産デフレをきっかけに景気低迷が長期化する現在、再三の公定歩合長期金利の引下げにより、資産運用ままならず、企業は体質強化のために、さまざまなコスト削減策を実施している。そしてその波は雇用面にまで及び、早期退職等によるリストラが進行中であり、失業率も最悪水準を推移している。

産業構造変化の加速、企業間競争の激化、人口高齢化のもと、根底で日本型雇用慣行が見直されており、労働市場の流動化に伴う規制緩和が必要である。

五、投 資

財テクブームであった八〇年代末以降、社会は土地や株式などの資産価値に大きく左右される結果となった。現状では企業の海外投資は投資収益を回収できる状況になく、バブル崩壊後四〇兆円に達した金融機関の不良債権問題解決にしても、金融システムの信用回復に向けた超低金利政策のもと未だ決着せず、国際評価の低下はジャパン・プレミアムに象徴される状況である。その他諸物価についても円高以降長期低落傾向となり、良い物が安くなければ売れず、売れないために値下げをする状況であり、価格競争は熾烈である。一四兆円を越える事業規模最大の経済対策による景気浮揚効果が期

待されている。

六、情報化

この十年程の間に、情報技術は飛躍的に発展した。機器の小型化はもちろんのこと、ユーザー数約六〇〇〇万人ともいわれるインターネットの加速度的な普及をはじめとする通信技術の進歩により、世界的な情報のネットワーク化が目覚ましく、デジタル広告などが注目され始めている。しかし、その機能に支障をきたした時の影響は計り知れず、回避策が十分に検討されているかは疑問であり、ますますブラックボックス化していく状況の一方で、総括的に把握できる管理機能が不可欠である。

七、環境

地球環境の悪化は避け難い事実である。オゾンホールも最大となり、自然の浄化作用を資源エネルギーの消費活動による影響が上回っていることは明白である。国際標準化機構（ISO）一四〇〇〇シリーズが発効するなど、環境ビジネスが期待される中、環境影響評価制度の検討をはじめ、原因の探求と適切な対処を早期かつ強力に実現するための政策はこれからである。地球温暖化防止条約をはじめとして、今後、危機意識の共有化のもとで各国の利害を越えた取組みが必要となる。

このように考えると、難題が蓄積した世の中の中の一つであるが、これまでも日本社会が数々の難題を乗り越えてきた実績をみると、これらが問題認識され、その解決へ向けた取組みがなされている以上、

社会全体としては何らかの調整能力を発揮するものと考えられる。しかし、個人的視野からは、樂觀視しているだけでは取り残されてしまうことになりかねない。まず身の回りからできることを一つひとつ固める意識で生活することが、これからの混沌とした時代に適合した生き方になるのである。何も手を広げず、既存の枠組みの中で小さく行動するのも一手段、能動的に回避しながら選択して行動するのも一手段だとすれば、一度しかない人生は、好奇心をもって積極的に行動し刺激あるものにした方が面白い。

健康管理や事故予防は、意識的に取り組んだ成果が目に見えて表れず、因果関係が不明確な分、意識が薄れがちである。しかし、危険因子を内にはらんだ健康状態もあれば、それらが排除された真の健康状態もあり、表面上は同じ健康でもさまざまである。交通事故にも同様のことがあてはまり、積極的に防衛運転をしたうえでの無事故と、単なる確率に助けられた無事故とは、その重みが異なる。どちらを目指すべきかはいうまでもない。

雇用のとらえ方については個人の意識を改めなければならない。専門的能力を高める努力もこれからは個人の選択と責任で行い、将来に備えることとなり、人的資本ストック型であれフロー型であれ、雇用関係のための個人の能力は一層の競争下に置かれる。

また、毎日氾濫する情報の中で何が真実かわからず、誤った選択をしかねない状況に遭遇することが増えてきた。当然のことながら、誤った情報から正しい行動をとることはできない。常に真実を見極めようとする意識をもち、判断力を養い、情報操作されないために取捨選択を行う態度で臨まなければならない。

私は、学生時代に弓道と少林寺拳法という静と動の一見相反する動きの武道を学んだ。しかし、表面上の動きの違いとは裏腹に、両者とも日々の肉体と精神の鍛練のもとに成り立つ筋力と集中力と気合いが必要であり、それらが凝縮した上での静なる動きであり、動なる動きなのである。

「天は自ら助くる者を助く」

この自助独立の精神がますます求められる世の中となり、しっかりとした自己を確立するうえで、一つの行動を起こす際にも、それが動であれ静であれ、何らかの蓄積に裏付けられた行動である必要性が高まってきているような気がする。

「労働組合に未来はあるか」



中部電力労組 本部

柴田 伸彦

〔プロフィール〕

しばた のぶひこ (31歳)

- 1965年 三重県亀山市生れ
- 1988年 中部電力株式会社 入社
岐阜営業所料金課 配属
- 1990年 財務部財務課
- 1991年 経理部財務課
- 1994年 中部電力労働組合本部執行委員
現在に至る

〈家族〉 妻、長男の3人家族

〈趣味〉 スポーツ全般、釣り、読書

〈愛称〉 柴ちゃん、しばたぬきくん

〈その他〉 ボーイスカウト活動 (現在、隊長)

一、はじめに

私が労働組合の役員となつておよそ二年半が経過するが、この間感じてきたことは“組合員にとって労働組合とは一体何なのか”あるいは“組合員にとって労働組合とは本当に必要とされているのか”ということである。

例えば、年間賞与要求時、賃上げ時などのオルグの出席率である。

もちろん一〇〇%の出席を期待しているわけではない。しかし、事は組合員それぞれの財布に関することなのである。せめて当該事業場の半数は出席しても良いと思うのだが、それは私の独り善がりなのだろうか。もしかすると組合役員としての立場に染まり過ぎて、組合員の気持ちが変わらなくなっているのかもしれない。

組合役員として最も大事なことは、組織を構成する組合員の立場に立つて考えることであると思うが、私に限らず組合の専従者というものはややもすると目の前の仕事に流されて、組合員にとっての組合活動という視点を見失いがちである。

そこで、今しばらく組合役員を専従という立場で担わねばならない私としては、今後の労働組合の姿について、組合員の視点も交えながら若干の考察を加えてみたい。

二、組合員にとっての労働組合

一組合員が、所属する労働組合に望むことは物質的な事柄が多いのではないか、ということは容易

に想像がつく。例えば、それは賃金・賞与や労働条件であろうし、福利・厚生といった面での物品の斡旋や施設の廉価な利用等であろう。しかも、それがより低いコスト（＝組合費）で、かつ自分の手を汚すことなく――自分が組合役員を引き受けるなど、組合活動の一端を担わずに――実現されればそれに越したことはないと考えていると思われる。まして、政治活動＝選挙活動を手伝わされるなど、もつてのほかと考えているだろう。かく言う私も、組合役員を引き受ける前まではこのように考えていたし、さらに言うなら、これら以外に組合が自分たちに何をしてきているのかがわからなかった、あるいは見えていなかったというのが正直なところである。

一般に、労働組合の存在感の喪失が言われているが、組合員から見れば自分たちの欲求を満たしてくれない組織に魅力は感じられないということであり、組合としても物質的な要求活動に限界を迎えた状況下において――右肩上がりの経済成長が今後望めない中で、要求結果についても右肩上がりが期待できない春闘――組合員を魅きつける組織活動が見いだせないということが、組合員の組合に対する無関心層を増殖させているのである。

一方、組合員は会社においては従業員であり、常にコスト意識を持って会社業務を遂行しており、組合に対する費用対効果についてもシビアになっていることは間違いない。これについても、運動論あるいは組織論といった旧来の労働組合の考え方でもって明快な解答をしてこなかったことが、組合員にとっては組合活動を見えなくさせ、組合員の活動から組合役員の活動になってしまったのではないだろうか。

三、経営側にとっての労働組合

経営者にとって最も望ましい労働組合とは、左翼的労働運動華やかかりし頃ならばいざ知らず、現在のような民主的労働運動を進める労働組合であるならば、経営方針に対する健全なチェック機能を果たしうる経営のパートナーであるとともに、職制とは別の従業員に対するチャンネルであると考えられる。もちろん、労働組合というチャンネルを複数持つことは、労務対策コストの増となることから経営としては受け入れられない。とすれば、健全な労働運動を推進する民主的な労働組合をその企業における唯一の労働組合とすることが経営側にとっては最善の選択といえる。

他面、昨今では左翼勢力の伸長をうけてとみられる労働事件が増加しており、経営として注意が必要であるが、公の企業として従業員がどんな思想信条あるいは宗教を持とうとそれに関与することはできないし、そのことによって他の従業員と差別してはならないことは明らかである。けれども、民主的な労働組合と左翼的な労働組合とは拠って立つイデオロギーが違ふ以上、それぞれの組織を守ることは何等おかしいことではない。とすれば、従業員が全員加入するユニオンショップ制を採用した場合、経営側がどちらの組合を望ましいと考えるかは自明の理である。

四、労働組合の目的

労働組合の目的とは、一言で言えば「組合員とその家族の幸せの追求」である。しかしその「幸せ」の範疇は非常に幅広く、単に物質的なものだけでなく精神的なものも包含していると言える。

十九世紀半ば、アメリカのAFL（現AFL—CIO）会長のサミュエル・ゴンパースは「More and more」という言葉で労働組合の目的を欲しているものとして表したが、労働者の経済的地位が相対的に低かった時代において物質的な要求が運動の中心となっていたのはやむを得ない。しかし、労働組合の本義からすればそれはあくまで手段的目的である。現在のように、日本の賃金水準が世界でもトップクラスとなり年間総実労働時間でもかなりの改善がなされた状況においては、運動の中心は組合員の精神的充足を求めるものに移されていくべきである。

ところで、現代社会の抱える様々な問題や課題は非常に複雑化・高度化されており、その中で生活する労働者にとってもその影響は大であるが、その解決には一企業の労働組合としては不可能なものが多い。そして、その多くは国や地方自治体でしか解決できない課題であり、組合にとって組合員の「幸せ」を考えるならば政治活動は切っても切れない活動である。

マズローの欲求段階説によれば、第一に生理的欲求があり第二に安全・安定の欲求があるというが、労働組合の真の目的からすれば、これまで生理的（生活的と言い換えてもいいが）欲求に重点を置いてきた運動を精神的な欲求（愛情、尊敬、自己実現）に重点を置いたものに移していくとともに（全くゼロにしろというわけではない。これはこれで必要だが）その基盤となる安全、安定といった欲求を政治の場で実現すべく活動することが必要である。

五、これからの労働組合の姿

これまで述べてきたように、労働組合は組合員の「幸せ」を追求する限り必要不可欠な組織である

し、経営から見ても必要不可欠の組織として認められていると考える。しかしながら、その活動がまあ組合員に認められているかという点甚だ心許ない。

労働組合の活動は組合員の自主性に基づき、その成果はすべて組合員に帰結するものでなければならぬが、組合員から活動が見えないあるいは活動の成果がはっきりとした形で見えないと言われる中でどのように組合に対する関心を高め、組合の一員であるという意識、組合組織への求心力を高めていくかが今後の労働組合の最大の課題であろう。

しからば、今後の労働組合とはどのようなものなのか。

経営側にとつての労働組合は、従前と同様経営のパートナーとしての役割と従業員に対するチャネルとしての役割を担っていくであろう。しかし、組合員にとつての労働組合は変化せざるを得ない。第一に、組合活動は組合財政、すなわち組合費の水準と切り離せないものとなるということである。すべての活動に対してはその費用に対する効果が求められ、より効率的な財政運営が必要となるであろう。

第二に、政治活動あるいは選挙活動は、組合と組合員にメリットがあるかどうかが推薦・支持・支援のポイントになるであろう。また、政治に対する無関心が世間一般で言われているが、それは選挙民の信頼に足る政治家がいなことが根本的な原因であり、組合員とて同じことである。よつて、組合として政治活動の必要性を説き、選挙活動に組合員を動員するならば、その候補者を支援するメリットと信頼できる人物であることを明確に示さなければならぬ。

第三に、組合活動は皆で進めていくものであり、組合役員が行うものではないと組合員に対して明

らかにしていく必要があるだろう。ともすれば、組合に対して「口は出しても手は出さない」という組合員がいるが、そこははっきりと組合役員が指導すべきである。組合員におもねる組合役員であってはならないし、民主的な組織であるからこそリーダーシップも必要となるであろう。

第四に、要求獲得運動が行き詰まりを見せつつある中で、要求活動＝獲得という図式ではないと組合役員自らが語ることが出来る組織でなければならないであろう。簡単に言えば、「できるものができる、できないものはできない」という正直な活動の推進こそが組合員からの信頼を得ることが出来るであろう。

第五に、すべての組合役員がやりがいを持てる組合の仕事の分担が必要であろう。すなわち、ご用承りのような意見収集活動や組合紙の配布といった仕事だけではなく、職場問題の解決ができる権限の付与や活動の財政的裏付けを行っていくことが組合役員のやりがいとなっていくであろう。

このように、労働組合が将来にわたって引き継がれていくには組合自らが、自己変革能力を持ち、社会の変化に適応して変化を遂げていかなければならないが、変化のベースにはあくまで労働組合の目的が存在するのであって、これなくして労働組合が労働組合たり得ない。

六、おわりに

労働組合という組織は、革新を主張しながら自らの組織や運動については最も保守的であると言われるが、私自身この二年半でまさにそのとおりであると感じた。しかしながら、社会が大きな変革の時期を迎えている中で、労働組合だけがその埒外にあるとは考えられない。したがって、労働組合と

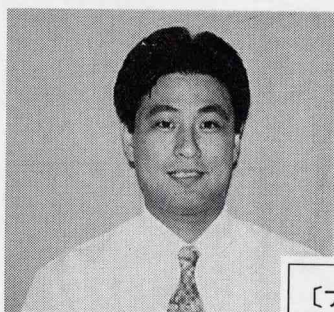
しても自己変革を図り、間近に迫った二十一世紀に向けて組織の再構築を図っていかなければならないと考えている。さもないければ、労働組合という組織は二十世紀の徒花と化してしまふであろう。

手前味噌にはなるが、中部電力労働組合も平成二年からUI（ユニオン・アイデンティティ）活動として組織の再構築を進めており、来年度からは新たな組織で組合活動を展開することとなる。

私もその一員として組合活動の一翼を担うこととなると思うが、ぜひとも組合員の、組合員による、組合員のための労働組合を念頭に活動を進めていきたいと思う。

以
上

最近思うこと



トヨタ自動車株式会社

小倉 克幸

〔プロフィール〕

おぐら かつゆき (34歳)

- 1985年4月入社
- 財務部を経て、1992年から人事部勤務

〈家族〉妻・長女(2歳)

〈趣味〉のんびりすること

一、人類の進化について

今日の業務もなんとか片付き（実際は明日にかける毎日であるが）、そろそろ帰ろうとする瞬間、

「あつ、今日もメールを見るのを忘れた！」と気づくことが多い。

最近では世界中の人々が自由に参加できる「インターネット」などというシステムが浸透し、小学生でもゲーム感覚でパソコンを使いこなすという。家に帰って新聞をみれば、「パーフェクTV」だの「ディレクTV」だの、これまたその仕組みもよくわからない情報源が突如として放送開始という話が載っている（当社も関係しているのであまり大きな声では言えないが）。本当にここしばらくの情報化の動きは、速いと言いたいようがない。人類もよくぞここまで進化したものだ。

振り返って自分を見ると、入社した十年程前はパソコンもオフィスにだいたい普及してきており、結構自由に操って仕事をしていたが、今はどちらかと言えば後追いについていくのに精一杯といった感じでとても情報化社会に対応しているとは言いたい。

しかしながら、まわりを見てみると、結構器用に使いこなしている人々も多い。情報化社会というのは、これを最大限に生かす人とそうでない人の間に極めて大きな差異を生じさせるものである。各企業も、情報化を業務効率化の大きな柱と位置づけているようで、これまた企業の対応如何では、今後大きな力の差がでてきそうである。

このまま、情報化が進展したらどうなるのか。確かに使いこなせば本当に便利な社会になるだろう。必要な情報は、自宅に居ながらにして得られる。会社に行かなくても仕事はできる。使いこなせ

なければどうか。脱落するか？

今回の中部産政塾では、どちらかと言えばこのような動きとは別の世界の方々の話が多かったこともあり（勿論無縁ではないが）、またさらに考えさせられてしまった。

二、情報化の進んだ社会

欧米などは、当然日本に比べて情報化が進行している。産業革命でもそうだが、日本は後からついていく。たぶん、日本人は器用だからうまくまたキャッチアップしていくのだろう。しかし、今回は今までとちょっと違う。情報化が進むと色々な面で均一化が進み、一方で変化がどんどん大きく、どんどん早くなる。当然、新しい発想、奇抜な発想を誰よりも早く、しかもベストのタイミングですることが重要になる。これで莫大な利益も得れるが、逆にそれがないと一気に谷底まで突き落とされる。非常にリスクな世界だ。

これまでの歴史をみても変化を起こすのは、日本人よりも欧米人に一日の長がある。並大抵の努力では日本人が世界を引っ張っていくことはできないだろう。

変化を先読みし、誰よりも早く的確に対応するためには、有効な情報をどれだけ集められるかが勝負である。CIA並の情報戦争に突入だ。（言い過ぎ？）溢れる情報の中から、必要なもののみを抽出し、戦略的に分析していく。変化に振り回されている人（企業）には不可能な作業である。

三、ポスト情報化社会？

欧米は、基本的に契約社会である。自分の位置づけがしっかりしている。だから変化が読みやすい。日本人はどうだろうか。しっかりと自分が見えていないと情報に振り回されやすい。だから、これからはこれまで以上に「個」が重要になる。

しかし、いったいこの情報化社会の行き着く先はどこにあるのだろうか。勿論、このような社会はまだ始まったばかりであり、何十年、何百年続くかもしれない。ただ、これまで以上に富は偏在し、人々は利那的になるだろう。人間性は維持されるのだろうか。

—— たぶんいつかまた大きな変化がある。どうかわるのか？ ヒントは、自然と融和する精神的な「東洋の思想」にあるのではないだろうか。世界はより公平感の強い、心の安定するシステムを求めている。そして、その時は、延々と続いた「列強」の支配（資本主義）が終焉する。

しかし、欧米はそれを許すか？

おっと訳もわからず飛躍すぎた。言いたかったのは、しっかりと自分を持って情報を俊別することが重要だということである。さあ、今日こそパソコンでメールを見て帰るぞ！

「かりや」物語

（以下は第7期産政塾生のみ知るところである）

むかし、むかし「愛知県」の「かりや」言うところに、一人の身寄りのない男が住んでおった。名前は忘れたが、なんでもその昔の総理大臣と同じとか言われておる。この男、仕事には熱心だが、その頃、とんと「おなご」にごぶさたしておって、よわい三十も越えたが、嫁のあてもなく、さびしい生活をしておったそうなの。

ある日、仕事場（なんでも「くるま」とかいいう当時の移動手段をつくっていたらしい）の上司から「中部産政塾」という、得体のしれないものに、塾生として行ってこいとこの指示があり、その男「忙しいからちょっといやだな」と思ったが、前に参加した人に「楽だぞ、卒論がうっとうしいけどな」と言われ、やってみることにしたそうなの。

その男、まさかこれが、その後の人生を決める大きな出来事になるとは、その時は知る由もない。塾生として集まったのは、その男の他、同じように「くるま」とか「エアバッグ（ハイカラな名前だが実は風船らしい）」など物をつくっている会社の輩や物売り、電気売り、金貸し、鉄道屋、役人とか色々な輩であったが、中に「組合」とかいいう怖い怖い存在も混じっていたそうなの。

塾生として、しばらく過ごしたが、ある時、名古屋（当時その地域の中心で結構都会だった）言うところのおおきな物売りの会社が集まる機会があった。その会社は歴史も古く、結構あこぎな商売もしておったようだが、集まったところは、意外に狭く、時々人に物を買わせようとする放送がはいる階段が急で怖い場所であった。その男も参加した。

集まった趣旨は、「写真機」をつかって、街並みを探索しようとのことであったが、その男はうわの空であった。町を徘徊する間、時におなごの腰巻きが干してあったりすると目を奪われるが、ぼうつ

として話にならない。

実は、集合場所の物売りの事務所にいた「一人のおなご（一人しかいなかったが）」に心を動かされてしまったのである。

徘徊が終了し、飲み会でもやるかということ、事務所を出るときにもそのおなごに話かけようとするが、言葉がでない。集団の一人が、「そのおなご」に「一緒に飲まない？」と声をかけた。思わず「ラッキー」と思ったが、どうもついてくる気配がない。

とはいえ、無理も言えず、一行は「飲み屋」へ移動した。店につくと、その男は乾杯もそぞろに、さっそく行動開始。「そのおなご」の同僚である参加者（物売り）に「ケイタイ」を使って呼び出すよう強要しはじめた。いやがる物売りを説き伏せ、なんとか呼び出しに成功した時のその男の笑顔の美しさは、その後も「かりや」に語りつがれている。

しかし、その男には、ひとつ心配事があった。それは、前出の怖い怖い存在の「組合」からの参加者のことであった。そしてそれは、現実のものとなったそう。（詳細については、差し障りがあったのか、誰にも語りつがれていない。）

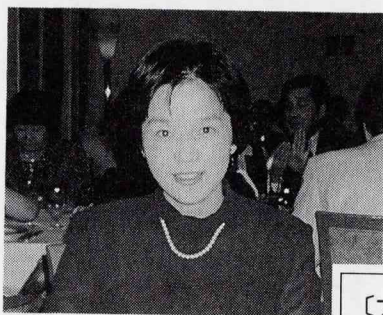
ともかく、呼び出した後、その男はそのおなごと一緒にお酒を飲んで、お話をしたが、さらに気に入った。（そのおなごもまんざらでもなさそうな感じであった）その男、ここぞと言うときに口がうまく、首尾よく電話番号を聞き出すことに成功し、その夜は終わった。その後、その男、しつこくそのおなごにまとわりつき、デートに誘うことその数数えきれず。デートの場所は、都会の名古屋にて、自らを都会風に装い、次第にそのおなごの感覚は麻痺するに至ったそう。

結局、会ってから1か月程度でそのおなごは完全にその男に心を奪われ、将来の約束をするまでに、なってしまう、その男は心の内でほくそえんだ。

そのおなご、背の丈はそう大きくはないが、美しく、性格のよい、誰にでも愛されるすばらしいおなごであり、その男に奪われたことに、数百人の男が涙を流したと記録されている。

その後、二人は幸せな生活を送り、「中部産政塾」は、自己研鑽にあわせて、自らの利益も得られるすばらしい塾として、全国に名を広め、今も語り継がれている。

ただ今、模索中!!



アイシン精機㈱ 人材開発部

勝 見 寿美子

〔プロフィール〕

かつみ すみこ (32歳)

- 1964年 静岡県 浜名郡生まれ
 - 1987年 アイシン精機㈱ 入社
- 現在人材開発部にてライフビジョンをサポートするシステムづくりを担当

〈家族〉 夫

〈趣味〉 短歌

一、はじめに

「この一年で自分のライフビジョンについてじっくり考えて、何らか自分で納得できるものを得たいと思います。」と誓って、第一回めの産政塾の会合を終えました。そして九カ月が経過……。

「あれ、もしかして、今日、最終回？」というほどあつという間に終わってしまいました。

産政塾では初めての女性ということで、事務局の方に余計な気を遣わせてしまったこともあるかと思いますが、私自身は男性と言えども同世代の集まりということで、すっかりリラックスをして、参加させていただきました。

同じ世代の男性と話すことはあっても、通常は仕事の話に限られているため、プライベートなこと、特に家庭のことについて男性はどういうふうに見ているのか、皆さんが話すことに大変興味をもって聞いていました。そして奥様のこと、お子さんのことを活き活きと話す皆さんを見て正直、驚きました。もっと仕事一辺倒で他のことにはあまり興味の無い生活をしているのかと聞いていたからです。驚く一方で安心したのも事実です。

こんな具合に私は、同級生の男の子に会って話をしている気分で産政塾で過ごすことができました。

二、ライフビジョンって？

今、私は、仕事でたまたま社員の皆さんにライフビジョンを持ってもらうことのお手伝をしています。これは「みんな、ちょっと忙しい生活から立ち止まって、自分なりに今後どんな生活をしたいと

思っているの？ これまでの生活はあなたの本当に望んでいる生活なの？」と考えてもらい、これまでで見落としていた、自分にとって大切なものをもう一度、気づいてもらい、具体的に実現していただくものとするものです。

これは既に自分のライフビジョンをもっている人にとってはもちろん、大きなお世話です。しかし、私も含めて大半の人は日々の生活に紛れてしまって、自分の内なる声に耳を傾ける精神的、時間的余裕がありません。そういう人にとって何らかのきっかけのきっかけにでもなってくれたらいいというのがこの仕事のねらいなのです。

ここでは私の仕事を理解してもらうことが目的ではないのでこのへんで仕事の紹介は終わらせていただきますが、この仕事を通して、やはり人の価値観・ポリシーみたいなものにとっても興味を持つようになりました。人が何気なく、取っているそれぞれの行動も言ってみればある思い、ある価値観から発しているということに改めて気づかされました。その人の行動を一つひとつ拾っていくとそれを束ねているポリシー、価値観というものが見えてくるものです。この人は、〇〇を大切にしているんだなあ何となく見えてきて結構楽しいものです。

では、私自身はどうかと問われるとこういう仕事についても自分のライフビジョン、キーワードがまだ見えてこないの、回りの人から何か吸収できるものはないかとキョロキョロしている、言ってみれば情報収拾期、観察期といったところでしょうか？

個々の行動を司る自分の思いというものも大切ですが、例えば、自分の大切にしたいものがそのまま仕事となり、文字通りライフワークとして取り組んでいる方もみえます。例えば、松下政経塾でお

会いた人もその一人です。その方は自らが孤児院で育ったという体験をもとに孤児院の現状を人々に知ってもらって、孤児院を変えていくぞという信念のもと活動をしています。まさに天職として取り組んでいるわけです。以前だったら、自分もそんな劇的な運命であつたら、ライフワークも持てただろうに、こんな平凡な生活だから、天職もライフビジョンもないんだよなで片づけていたと思います。

しかし、今では、ライフビジョンって、そんなにカッコいいものでなくても、言葉にできなくても自分で何となくしっくりくれば、いいんだよなとわかってきました。自分が生活していく上での一貫した思いというのでしょうか、これだけ大切にしたい、譲れないという思いを私も早く見つけたいと思います。それは家族かもしれないし、趣味かもしれないし、仕事かもしれない。いずれにせよ、安心感、達成感、やり甲斐を感じるところに落ちつくのでしょうか。

三、減私奉公反対!!

そうした時に私が、今回、産政塾に参加して安心したと感じたのは、先ほども書いたようにここで出会った男性たちがみんな「企業戦士」だけではない、会社以外の顔を持っていたということです。会社だけでない、何らかの生活への思いみたいなものを感じとれました。これまでの男性は好むと好まざるとにかかわらず、いや大抵の男性は好んでしょうが生活といえはイコール会社生活でそれ以外の「私」の部分というのはほとんど捨てた上で生活をしてきたと思うのです。(本人には、捨てたという意識がないかもしれませんが・・・) そうしないとまわりの人から、うしろ指をさされるという企

業文化・風土みたいなものが確かにあったと思います。いや、今でもあるでしょう。労働時間短縮が叫ばれている今でも、過労死の記事を時々、目にしますから。そんな中で、同世代の男性もやはりこれまでの男性が歩んできたような「企業戦士」としての生活を全うしようと思っているのだから、そんな訳はない。やはり新しい考え方で違う働き方をめざしているに違いない、この二つの思いが日頃から頭にあり、疑問に思っていたところです。

ここで私が問題にしているのは、「企業戦士」としての生活が問題ではなく、選択の余地がない中で「企業戦士」としての生活、滅私奉公的な生活を余儀なくさせられていることを問題としているのです。自分が仕事を通して、達成感・やり甲斐を得たいと思ったら、ある程度、「私」の部分をけずらざる得ないかもしれません。本人がそれを選択していれば問題はないのです。そうでなく、皆が皆「私」の生活をけずり、過労死近くまで働くことを強制する風土に問題があるのです。もうそんな風土は、そろそろピリオドを打ってもいいんじゃないかと強く思います。

もっと自然体でいこうよ。仕事もがんばるけど、趣味だってじっくりやりたいとか、もっと皆で生活そのものを楽しめるようになりたいなと思います。女性だから、そんなに呑気なことを言っているんだと思う人も多いかと思いますが、男女関係なくもっと人間らしい生活に戻していきたいでしょう。実は、これを最も言いたい相手は、毎日、深夜残業を重ね、休日出勤もしている一番身近にいる夫なのですが。

四、人生のキーワードを求めて

結婚をしたことにより、独身のころとは違い、不確定要素も少なくなり、人生設計も立てやすくなりました。三十代前半は出産・育児に重点を置き、三十代後半は社会復帰のためのリハビリを始め、四十代では・・・と漠然と考えていますが、子供は天から授かりものですし、計画どおりにはなかなかうまくはいきません。この条件とこの条件が揃ってからと思っていたらいつまでたっても、ことは始まりません。たとえ、計画の修正はあったとしても、それぞれの時で自分が何を大切にしたいのか、また何をしている時に生き甲斐・達成感を感じるのか、自分の内なる声にもっと耳を傾けながら、私にとっての人生のキーワードを日々の生活の中で、模索し続けようと思います。

Tell it to your heart



トヨタ自動車労働組合

西 田 明 生

〔プロフィール〕

にしだ あきお (33歳)

- 1963年 兵庫県西宮市生まれ
- 1986年 トヨタ自動車㈱入社
第2購買部設備室配属
- 1994年 第1購買部第2部品室へ異動
- 1995年 トヨタ自動車労働組合 (専従)
現在に至る

〈家族〉 妻 (佳代)、長男 (圭佑 4 歳)
次男 (匠吾 1 ヶ月)

〈趣味〉 テニス、スキー、育児、野球観戦
(当然、オリックスと阪神ファン)

〈モットー〉 明るく、前向きに、そして
さわやかに

はじめに

今年で入社して十一年目。労働組合専従となって早一年が過ぎたが、毎日貴重な経験をさせていただいていると思う。しかしながら、組合専従ということは、入社時には考えもしなかったことである。これは私に限らず、殆どすべての組合専従者がそう感じていることかもしれないが、今回、産政塾の卒論を書くという機会に恵まれたため、最近感じたことと考えていることについて書いてみたいと思うが、とりとめもない文章になることを最初にお断りしておきたい。

「志」を持って

現在、労働組合専従になっているから書く訳ではないが、当然のことながら私がトヨタに入社したのは理由がある。少し長くなるが、紹介させていただきたいと思う。

以前、日本テレビ系で毎年秋になると「アメリカ横断ウルトラクイズ」という番組が放映されていたことをご存じの方が多いと思う。私も中学生の時に初めて見て以来、ファンとなり、いつかはあの番組のように、アメリカをバスで、気が向くままに旅してみたいと思うようになった。その思いは大学二年の時、南部を中心としたバスでの一人旅という形で実現したが、その時、痛切に感じたのが、語学力の無さということだった。

そこで、私は大学三年の夏休みに、スタンフォード大学での語学研修に参加し、自らの英語力に磨きをかけることを決意した。現地においては、単位習得のため、英語でのレポート提出が義務づけら

れ、私自身、テーマ選定で相当悩むこととなった。ちょうど語学研修に参加した一九八四年夏は、トヨタとGMの合併会社である「NUMMI」が立ち上がる直前であり、アメリカから見た日本の自動車産業あるいは生産方式といったことがアメリカの新聞や雑誌によく取り上げられていた。結局、私はそうした記事を通して、自動車産業に興味を抱くこととなり、レポートも「何故日本の自動車産業が成功したのか」というテーマについて、アメリカ人の眼から見た記事を紹介しながら、まとめることとした。

そのことがきっかけとなり、日本に戻ってから、自動車産業に対する興味はふくらむばかりであった。そして、これから海外進出が盛んとなるであろうトヨタの一員となり、海外工場、とりわけ北米の工場の立ち上げに関わりたいという気持ちが強くなったのであった。トヨタの面接においては、先程のアメリカでのレポートを活用し、その熱き思いを伝えながら自己PRを行ったこともあってか、入社運びとなった。

その後、十一年の歳月が流れたが、入社前の私の思いは今も変わっていない。今は少々遠回りをしているように見えるが、私の思いは実現する方向に向かってしていると確信している。また、今積み重ねている貴重な経験は、絶対に将来の自分にとってプラスになるはずである。「こうしたい」という強い「志」を持ちつづけていれば、その方向性が間違ったものでない限り、その「志」は必ず成就すると私は思っている。

「産政塾」について

昨年十二月のスタートから、全部で七回の会合を持ち、第七期産政塾は終了した。業務の都合で最終回である第七回に参加できなかったのは本当に残念であったが、私としては毎回の会合を楽しみにし、産政塾のスケジュールは最優先として参加してきたつもりである。さて、「産政塾」であるが、これは今更言うまでもないことであるが、異業種交流の場であり、そして「お互いが夢を語り、大いに論争をし、そういった中で自分を磨いていく道場」である。その意味において、「産政塾」の今後のことを思うが故に、私を感じたことを書いてみたいと思う。

「出席率について」

私自身が一回欠席しているため、偉そうなことは言えないが、メンバーとなった以上はもっと出席すべきであると思う。事務局の方も苦勞されているはずであるし、このことは「産政塾」の運営の根幹に関わる問題であると思うから、あえて書かせていただくことにした。

確かに、「産政塾」に参加するメンバーは、年代的に考えても、公私にわたり、様々な面で中核として頑張っている人達ばかりである。それゆえ、毎日忙しいというのは十分に理解できる所である。しかし、そういう人だからこそ、この塾のメンバーに選ばれているのである。メンバーに選ばれた以上は、自分の力でスケジュールを何とかして「参加する」のが基本であると思う。余計なお世話だと思うが、第八期生の皆さんには大いに期待をするところである。

「テーマ・運営方法のあり方について」

私自身も反省すべきであるが、今期について言えば、塾生がテーマ選定に殆ど関与していなかったと思う。事務局に任せきりで、受け身になっていたことを素直に反省しなければならない。そもそもの狙いである「お互いが夢を語り、大いに論争をする」といった観点は非常に大事であると思う。しかしながら、事務局主体で用意したテーマの場合、事前に資料が配布されているといっても、全員が論争するというのはなかなか難しいのが現実である。そのことにこだわるわけではないが、その観点を踏まえるならば、例えば、天下国家を論じるような多少硬めのテーマでもよいかもしれないし、直近で話題になっているような社会性のあるテーマでもよいかもしれない。ともかく、テーマの選定は塾生主体という本来の形が望ましいと思う。

運営方法については、外部講師による講話、講演等といった形以外のものを考えていく必要があると思う。例えば、全体を3チーム程度に分け、それぞれ年間取り組みテーマを決め、そのテーマに関連する講師を招き、お互いが認識を深めあい、また論議をするという形でもよいのでないか。そして、最終会合において、それぞれのチームが発表を行い、その内容を産政塾誌にとりまとめるという形も考えられる。

私は「異業種交流会」はネットワークづくりということは大切であると思うが、外部へのアウトプットを行うことも大変重要であると思う。メンバーそれぞれが忙しい身であるということを考えれば、難しい面も確かにあるが一考いただければと思う。

いろいろと好き勝手に書かせていただいたが、「産政塾」をよりよいものにするためと思つてのこ

とであるので何とぞご了承いただきたい。

候補者付きを経験して

労働組合で貴重な経験をさせていただいていると既に書いたが、その際たるものが、先般の第四十一次衆議院選挙での経験であった。この時、私は九月中旬から十月二十日の投票日まで、伊藤英成代議士の「候補者付き」を務めさせていただいた。五週間の長きに渡り、英成さんと共に最前線で選挙を戦うことができたのは本当に貴重な経験であったと思うし、この経験はこれからの自分にとって大きな財産の一つになっていくと思う。

選挙の手伝いをする事と自分が初めてであり、もちろん「候補者付き」の経験もない私が五週間無事に役目を果たすことができたのは、様々な方々のバックアップ、そして英成さんへの多くの皆様の温かいご支援があったからこそであると思う。

また、私自身としては、次の三点を常に心掛けてきたつもりである。

一つめは、「英成さんご本人がどう感じられるか、どう思われるかということ」を、できるだけ先読みし、そして着実に手を打つということ。」

二つめは、「一度ご指摘あるいはご指導をいただいたことは必ず守ること。また、回答あるいは対応が必要な場合はクイックレスポンスで行うこと。」

三つめは、「この選挙には絶対に勝つということを自らの信念として持ち、私自身が自身に満ちた言動を取る。」という三点である。

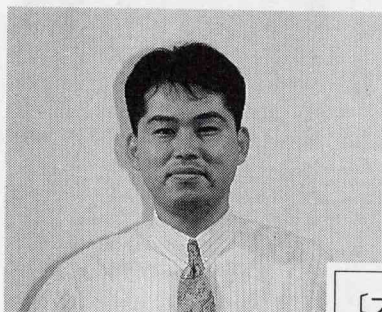
もうおわかりのことと思うが、選挙だからと言って何か特別なことをした訳でもなく、また、特に難しいことをした訳でもない。普段の仕事を進める上で注意すべきことを実施したまでと言えば、それだけのこともかもしれない。また、もう一つ言えることは、相手が代議士であるため、いろんな意味で遠慮してしまいがちになるものである。しかしながら、現実には変な遠慮などせずに、側で見ていて気付いた点があれば、どんどん進言した方がよいと思う。私は非常に生意気だったかもしれないが、そう考えて、実際に行動してきたつもりである。以上、今後の何かの時に、参考にしていたければ幸いである。

おわりに

今回、「産政塾」に対して、多少辛口な文章を書かせていただいたのはいるが、参加する場を与えてくれたことに対して感謝しているし、ここで出会った素晴らしい同期生の面々とはこれからも親交を是非とも深めていきたい。

私自身も日々忙しいわけであるが、自分を見失わず、また志を持って、毎日一步一步努力を重ねていきたいと思う。偉そうなことを書いてきたが、この二ヶ月、土日返上が続いたため、満足な家族サービスが全くてきていない。いつも私を支えてくれている家族に感謝するとともに、先ずは、生まれて一ヶ月の次男に、「お父さんの存在を覚えてもらうこと、存在を意識してもらうこと」に全力を尽くしたいと思う。

21世紀の日本



日本特殊陶業株式会社 人事部

高橋 剛

〔プロフィール〕

たかはし つよし (29歳)

- 1966年 愛知県名古屋市生まれ
- 1989年 日本特殊陶業㈱入社
人事部人事課配属
現在に至る

〈家族〉 独身

〈特技〉 仕事以外

〈モットー〉 プライド

今世紀も残すところわずかとなった。新たな時代二十一世紀はどのような時代となり、日本はどういう役割を果たしていくのだろうか。

戦後世界は激動の時代を過ごしてきたが、特に九〇年代に入ってからの変化には目を見張るものがあった。世界を二分してきた東西冷戦構造の終焉と社会主義の破綻は、短期間の内に世界構造を大きく変化させてしまった。

戦後世界の枠組みは、アメリカとソ連という二つの超大国によって作られ、両者の絶大なる軍事力で一種の均衡が保たれてきた。しかし、その軍事力増強はお互いに多大なる犠牲の上で行われてきたのであり、その経済的破綻により終幕を迎えた。そしてこの東西の緊張緩和は、世紀末においてやっと新たな協生の時代への幕を開いたのである。かつて世界を制覇してきたのは軍事力だったが、今日では経済力が世界を制覇する時代になった。それを認めざるを得なくなったことが、最近の急激な世界構造の変化を引き起こした。

そういつた世界構造の変化の中で、日本も大きく変わった。経済大国日本の登場は、これからの一つの大画像を提示したとも言える。戦後憲法により武力を放棄させられたことが、かつての（軍事）大国への道を閉ざすことになり、結果として平和な世界における新たな大画像を創り出したとも言える。

戦後貧しかった日本は、アメリカの豊かさを目標とし、そして今日の社会を築き上げた。しかし、その思い描いていた社会は本当にユートピアだったのだろうか。

アメリカと日本

たしかに日本は豊かになった。今では世界有数の工業力を誇り、自動車・情報通信をはじめさまざまな工業分野で世界のトップを占めるまでになった。そして、国が大きくなるのに合わせて、日本人の生活も着実に向上した。憧れの欧米のライフスタイルを移入した結果、何不自由のない便利な社会ができあがった。日本全国どこにいても同じ物を手に入れることはできるし、欲しい物があれば電話一本で届けられる。電話やテレビはほぼ全家庭に普及し、自動車も今や一家に二台三台も珍しくはない。

しかし、経済大国となった今も国民は豊かさを実感していない、とよく言われる。物は有りあふれているのに何故なのか。日本は今やアメリカを凌ぐ、世界一と言ってもいいほどの経済大国なのである。確かに物は豊富で、サービスも充実している。道路・公園、学校、娯楽、現代文明の何もかもが揃っているのに何故なのか。

一方アメリカはというと、国家は膨大な対外債務に苦しんでいるのにも関わらず、国民は生活をエンジョイしている。レジャーにスポーツに、様々なスタイルで、思い思いに楽しんでいる。消費の方がはるかに国内生産を上回っているため、不足分は外国からの輸入に依存しているのだが、元来楽天的なのか借金をしてでも楽しむといった感じである。

最近の日本でも、そういったレジャー志向が高まり、その中でアウトドアライフが一種の流行となっている。しかし、みな同じ様なことをしており、それぞれが個性的な楽しみ方をしているようには思われない。それも当然で、同じ様な店で、同じ様な道具を買ってくるのだから。しかも、雑誌とかに「これはいい」とか書いてあれば、その通りのことをしている。自分自身で考えるのではなく、

教えられたままのことをして、楽しんだ気になっているのである。

「個」と「和」

独創力に欠けるという国民性は、そのまま社会にも現れている。日本では「個」よりも「和」が尊重される。人と違うことよりも、人と同じように振る舞うことがより望まれ、「個」は時として犠牲にされる。それが日本人の美徳である。

ところが、アメリカは対照的に「個」がもっとも尊重され、何からも自由でなければならぬ。たとえ「和」を乱すとしても、「個」の権利は絶対的であり犠牲にされることはない。

スポーツの観戦の仕方には、両者の特長がよく現れている。日本の試合会場には必ずと言っていいほど応援団なるものが出て、その音頭のもとに応援をさせられる。メガホンを持って、応援歌を歌って、全てが一緒であることが要求される。

しかしアメリカでは、皆がそれぞれに楽しんでいる。顔にペインティングをし、思い思いの垂れ幕を作り、それぞれが個性的な何かを考えている。人とは違うことをする事を楽しんでいる。ここでは応援を強制されることはない。

ところが、最近の日本でも「個」の尊重がさかんに言われるようになった。物質的には満たされた今、今度は精神的な充足を求めて、何にも束縛されず、自分自身で選択する権利が主張されるようになってきた。押しつけではなく、自分で選べる自由を。しかし先述したスポーツ観戦の例のように、とても「個」が尊重されているとは思われないことが、まだまだ多く残っている。根本的に「個」を

犠牲にすることが日本の美徳なのだ。

「他の人がやっているから…」とよく言うが、これは「個」という自分を主張しないで、周りに合わせる「和」を重視している現れである。その事が良いか悪いかではなく、多数派か少数派かということが重要なのである。また、日本では六月と十月に衣替えをするが、これもその典型であり、本来自分が暑ければいつから夏服にしてもいいし、寒ければいつから冬服にしてもいいはずなのに。

「赤信号 みんなで渡れば 怖くない」

という川柳は、日本人の特質をとてよく表している。

日本はどうなるのか

日本は今、経済力で世界の頂点に君臨している。かつての軍事大国のように、膨大な軍事費が必要なく、その分を社会資本の整備に費やすことができたことが、今日の地位を築き上げた。軍事力に頼らない日本の発展は、平和な世界の実現の大きな支えとなる。日本の成功は、今までの戦争に対するムダな投資を、社会資本整備という有意義な投資に変える決断を世界にさせた。これこそが、経済大国日本の新世紀における役割であろう。世界平和の実現は全人類共通の願いであり、軍事力を持たない日本自らにとっても大変重要なことである。

また、日本は今まさに「経済」大国としてスーパースーパーパワーを発揮し、世界をリードしていく立場になった。かつてのアメリカがしたように、大国としての責任を果たす時が来た。国内景気が多少悪化しようとも、今まで受けた恩恵を今度は次の国々に施す時である。自国優先の独りよがりの行動は、

大国としての振る舞いではない。日本は元来「和」を尊重する国なのだから、世界全体の共存共栄のためにその美徳観を発揮する時である。経済援助・人的援助・技術援助、非軍事力による「パックス・ジャポニカ」は、日本が大国としての自覚を持ち、大国としての振るまいが出来たときに訪れよう。

我々のすべき事

それでは、我々一人一人はどうすればよいのだろうか。

一つには、大国日本という自覚を持ちながらも、決して驕らないことである。何か援助をするにしても、決して「くしてあげる」という気持ちを持たないことである。そのような態度では、反感を買うことすらあれ決して喜ばれない。同じするのであれば、お互いに気持ちよい関係を保ちたいものである。

二つには、本当に相手のことを考えて、最後まで責任を持って行うことである。押しつけの親切ではなく、何が本当に必要なかを見極める必要がある。最近のボランティア活動の普及には、その点で若干心配がある。ボランティア活動をする側の自己満足に終わることのないようにしなければならない。

大国としての振る舞いとは、大人としての振る舞いと言えよう。それは、子供を育てるときの気持ちを考えてみればいい。そういう気持ちで他国と接することが、他国の成長の真の手助けとなり、そして自分自身の向上にもつながるものと思う。

96年夏 雑 感



トヨタ車体㈱ 人事部

吉 田 茂

〔プロフィール〕

よしだ しげる (32歳)

- 1964年 愛知県名古屋市生まれ
(11月8日生)
 - 1987年 トヨタ車体(株)入社
富士松工場工務部配属(部品手配を担当)
 - 1990年 人事部に異動(労政、人事諸制度企画、賃金を担当)
現在に至る
- 〈家族〉 独身(あと3か月ほど)
- 〈趣味〉 クルマ、モータースポーツ観戦
- 〈モットー〉 いつも夢みて、自然体で

一、スポーツ中継

「やっぱり、生がいちばん。」

これ、ビールの話ではない。96年の夏はアトランタオリンピックにはじまった。

時差の関係でメインの競技時間は日本時間の未明から明け方にあたり、随分多くの人が夜更かしをしたであろう。かくいう私は翌日の仕事に支障があつてはいけな（横着して）、ハイライト場面をまとめて放送してくれるダイジェスト特別番組中心に観戦したのだった。

事実、アトランタオリンピックのテレビ中継はNHKと民放各社合わせて、過去最高のオリンピック中継放送時間を編成した。朝早くから、「オリンピック速報」と銘打って、民放各社が交替で番組をやっていたし、また深夜になるとTBS（今年何かと話題の多かったキー局）のアナウンサーが他局であるフジテレビで実況をやっているなんてことがあった。私の記憶が正しければ、初めてのことがある。その昔、オリンピックといえば、NHKといわれていた時代とは、隔世の観がある。

しかし、今振り返って考えてみると、ただあちこちでバラバラに中継していた印象をうける。確かにいつでもオリンピックのダイジェスト、ハイライト場面を見ることができた。でも、何かが足りない。

そう、臨場感に欠けているのだ。ダイジェスト番組の性格上、結果があらかじめ分かっていることはやむを得ないとしても、報道する側の司会者・解説者が訳知り顔でコメントしてしまい、視聴者に妙な安堵感をあたえてしまっているのだ。勝ったら勝ったで安心感、負けたら負けたで諦め感を見る

側に与えている。勝った喜びとか、負けた悔しさとかが伝わってこない。どんなに人気タレントを配しても、金メダル選手が生出演してもその場の臨場感が希薄なのだ。もっとも、勝負の行方がわかっているから、換言すれば勝ったから見るという人にとってはこの上ないことなのだ。（私のプロ野球観戦はこれに近い。）

スポーツ中継は「臨場感が命」なのだ。私はオリンピック期間中、改めてスポーツ中継の成否のカギを握るのは臨場感であると強く意識させた場面に遭遇した。

ほとんどダイジェスト番組で済ませた私が偶然に見た、いや奇跡的に目覚めて生中継を見た競技が、女子柔道四八キロ級の田村亮子選手の決勝戦である。

試合開始直後の勝利の瞬間を見逃すまいと画面を凝視する緊張感。金メダルへの強い期待感。四分の試合時間が刻々と減っていく、決定的なチャンスがおとずれない田村選手の試合運びを冷静に、かつ少し焦り気味に実況するアナウンサーと解説者の何とも言えない緊迫感。ひょっとしたら負けるのではないかという不安感。そして、試合終了を告げるブザー音。負けて、畳に呆然と座り込む田村選手。勝者を褒め、田村選手の健闘を讃える実況。

わずか四分間に凝縮された感動が、その瞬間を一緒に共有できた私に今もなお強烈な印象となつて残っているのだ。これこそがスポーツ中継の極みであり、原点だと感じた。

「やっぱ、生がいちばん。」

二、マニアック (maniac)

マニアックを「現代外来語辞典（三省堂）」で調べると、「偏執狂」とある。偏執狂を「岩波国語辞典（岩波）」で調べると、「ある物事に執着し、常識はずれの事を平気でする精神病。モノマニア。」とある。

私は「あなたの趣味は？」と問われたとき、「クルマです。」とこたえている。自分で自動車免許を取得して以来、この道に入り込んだ。それ以前はむしろどちらかと言えばクルマ嫌いだった。なぜならば、ブルートレインを追っかける「鉄道マニア」であり、一線を退いたSLに夢を馳せる「鉄道模型少年」だったからだ。どんどん鉄道の活動領域を狭めていく自動車に嫌悪感さえ抱いていた。そう、私が鉄道マニアだったときはまだ「国鉄」だった。しかし、そんな私が十八歳になり、自動車免許を手にした瞬間から自動車に取りつかれてしまったのだった。

特に興味をひいたのは、自動車の中でも特異な存在の自動車である、レーシングカーだった。走ることを徹底的に追求した自動車であり、新技術・新機構満載のレーシングカーとその実験の場であるモータースポーツの世界へ傾倒していった。レーシングカーの持つ機能美と、オイルの匂いと美しい女性にあふれたモータースポーツの世界の虜になってしまった。発病した当時の私は、自動車趣味の入門書から少し高度なメカニズム解説書、五種類の自動車雑誌を暇さえあれば読み、自分はなぜエンジンニアにならなかったのだろうと恨んだものだった（ちなみに私は、法学部）。

私の病状はこれ以降どんどん進行し、円高ショックで打ちひしがれていた自動車業界への就職、年

一〇回弱のサーキット通い、ジムカーナ競技への参戦、東京モーターショウもうで、カタログ・自動車雑誌バックナンバーの収集（当時の定価の五倍もするバックナンバーを手にし嬉々としている）、レース番組のVTR収集…その病状の枚挙にはいとまがない。

無論、この病状の進行について後悔などしていない。むしろ生活いや人生が豊かになったときえ思っている。仕事の失敗や失恋など気分が滅入ったときに、この世界の扉を開けばリフレッシュでき、時間の経つのも忘れてしまう、自分にとっては欠くことのできない世界であるからだ。

だが、ここにきて発病後、最大で最強の治療薬（？）が発見された。この薬の投与を何とか阻止しなければ、治癒し、まっとうな社会人になってしまう。その治療薬は劇薬にも媚薬にもなる優れものであるがゆえ悩みは深い。

それは人生のコ・ドライバー（co-driver）の出現である。こんなに早く発見されることを予想だにしていなかったのだが…。

三、産政塾

「次の産政塾は吉田君に行ってもらおうから」

私は三十歳にして、初めて親元から独立し、一人暮らしをした。大学も地元の大学だったし、会社も地元の自動車関連企業なので、いままで家を離れたことはなかったのだ。一人暮らしを始めようと思ったきっかけは、マンネリ化した生活を一新することにあった。

十年前、クルマ好きが講じて自動車に関係する仕事に就こうと心に決め、リクルートスーツに身を

固め、会社訪問をしていた。しかしながら、折しも「円高ショック」による不況のため、企業の門は堅く閉ざされており、大変苦勞し、事実トヨタ車体の最終面接では当時の社長から、「もう自動車はだめだよ。つぶれるかもしれないけれどもいいのか。」と最終確認があり、ついいうっかり内定がほしいばかりに「はい、かまいません。」といったのが、運の尽きだった。いま思えば、随分生意気なことをいう学生をよく拾ってくれたと感謝している。(私はトヨタ車体を受けた時点では内定をもらっていなかった。)

あつという間の十年がすぎ、会社生活にも慣れ、仕事面でも一応充実していたが、その反面、初心を忘れつつあることを自分自身気づいていた。二十二歳の好奇心、仕事に対する姿勢、貪欲さ、ひたむきさを徐々に失ってゆく自分に憤りというらだちをおぼえていたが、打開策を見つけることも容易でなかった。そこで、一度一人になって生活をしてみることから何か突破口が開けるのではと考え、思い切って多額の借金を背負うことを覚悟して、独立したのだった。

「次の産政塾は吉田君に行ってもらうから」

この話を聞いたとき、正直なところ「何か、やっかいな話だな」が最初の感想だった。しかし、会社生活十年目を迎えるにあたり、自分に新たな活力を与えてくれることを期待し、また先輩の「いい勉強になるから。」という後押しもあり、産政塾の門を叩いた。

結論から言えば、産政塾は当初の期待どおり、私に突破口を開けてくれた。フィールドワークや「気」の実践など全ての会合が楽しかった。最も印象に残っているのは「松下政経塾との対決」だ。志し高く政治家の道を目指し、自らの力で成就しようと懸命にもがき苦しんでいる塾生の姿をみて、

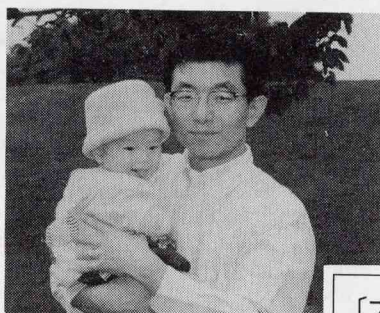
今の自分に欠けている一面だと感じさせられた。彼らの生き方は今の時代では最もはやらないものにちがいない。しかし、他人から何を言われようと自分の夢、意志を貫く姿勢は、すっかり訳知り顔になりつつある私がどこかに忘れてきたものだと感じさせられた。ただ同時に、塾生に対して、世間一般の多くの人の政治的無関心さを目のあたりにしていない印象を持ったことは否めない。だが、この日出会った方々がいつか政治の世界に新風を吹き込むことを願ってやまない。

また、私にとって産政塾はいくつかの出会いをあたえてくれた。産政塾に参加された面々は人事・労働組合を支えている方々で、人間的にも魅力のある方々ばかりだった。社会人になり、仕事拔きの人間関係を築くことは結構難しいもので、しかもそれが他の会社の人となると皆無に近い。それが会合を重ねていくうちに、本音も飛び出し、“割り勘負け”しない人が出現したり、“不良債権問題”を攻める人、攻められる人がいたり、“他人の恋路”を邪魔する人がいたり、“ちゃっかりうまく”やる人が出たりと、たとえるならば、微妙な年齢差のある同期入社という人間関係を築けたことをとても感謝している。産政塾での財産はこれからの十年の糧になるにちがいない。そして、産政塾で私が今回いちばん多くの収穫が得たことをご報告し、結びにしたいと思う。

追記

人生のコ・ドライバー探しにご尽力いただいた方々には本当に感謝しています。

地元名古屋の発展のために



名古屋鉄道㈱ 人事部

吉 川 篤 史

〔プロフィール〕

よしかわ あつし (33歳)

- 1962年 名古屋市生まれ
 - 1986年 名古屋鉄道(株)入社
鉄道、バスガイドなどで研修
その後 財務部、ZIP-FM派遣を経て
 - 1995年 人事部 現在に至る
- 〈家族〉 妻と長男
- 〈趣味〉 楽器演奏(Oboe)、音楽研究(特にロシア国民楽派、イギリス印象派)
ドライブ、街おこし、相撲、映画
(男はつらいよ)

〈モットー〉 邂逅を大切に

地元・名古屋の発展のために

近年この名古屋圏では、中部新国際空港を始め二十一世紀万博、首都機能誘致などの大規模プロジェクトが進行している。しかし、その実現性は総じて高いとは云えず、唯一第七次空港整備五ヶ年計画で建設が決定している中部新国際空港においても、万博開催の可否、或いは首都機能の移転先によってその建設時期、建設規模に大きく影響が出てくるものと思われる。

そもそも、こうしたプロジェクトが持ち上がった背景には、名古屋市の中枢管理機能の集積が著しく低下していることがあげられる。高度経済成長時代における都市機能を計る指標は工業であった。しかしその後、産業構造が大きく変化したのに伴い、中枢管理機能、つまりオフィス機能こそがその都市のランク・成長の指標となってきた。

この中枢管理機能は、行政的管理機能、経済的管理機能、社会的管理機能に分割できるが、例えばその中の経済的管理機能の指標の一つ、上場企業の支社・支店数を見てみよう。一九九〇年時点で名古屋市内にある支社・支店数は一一九二。これに対して発展著しい福岡市では一〇一八、その差は一七四である。その十年前の一九八〇年にはその差が二〇二あり、両市の格差が急速に縮まりつつあることがわかる。更に、松下政経塾の「未来予測二〇二〇年の六六四都市」によれば、名古屋市の人口は二〇一〇年に札幌市に抜かれて全国五位にランクダウンすると予測されている。三三一万人の人口（一九九五年国勢調査）を擁する横浜市が、中枢機能の面では大阪市（二六〇万人）や名古屋市（二一五万人）の下位にあるように、人口の絶対数がそのまま中枢機能にリンクするとは限らないが、夜

間人口もその都市の規模、成長力を表す一つの指標であることは否めない事実である。こうした東京一極集中と地方中枢都市の成長によって大阪市、名古屋市と札幌市、福岡市の格差が次第に縮小してきており、三大都市圏といわれてきた日本の都市形態も、東京と大阪市、名古屋市を含めた地方中枢都市といった構図になりつつある。

今後こうした状況が続いていけば、名古屋の経済活動が停滞し、中枢機能の相対的な低下を引き起こすことになる。そうなれば中央リニア新幹線開通の暁には、「のぞみ」が日に一本通過するどころの騒ぎではなく、主要列車の多くが通過してしまいう事態にもなりかねない。また文化活動面で考えても、著名アーティストの公演が札幌、福岡では開催されるにもかかわらず、名古屋では開催されないことが日常化してしまうことも予想される。事実、既に名古屋には日本で随一のオペラハウスである愛知県芸術文化センターを擁しているにもかかわらず、海外からのオペラで名古屋のみで公演があったものはローマ国立歌劇場来日時の一回で、他はオペラハウスのない他都市との併演か、ともすると日本最高の設備を誇る名古屋が無視されて、他都市だけの来日になってしまっている。二十一世紀を迎えてからも、名古屋が少なくとも現在の三大都市圏の一つであり続けるためには、前述した大規模プロジェクトのような地域の起爆剤となるものがどうしても必要なのである。

ところが、過去の名古屋オリンピック誘致失敗時と同様、今回の万博誘致に際しても一部の住民（中には住民でない者もいる!!）が反対運動を起こしている。その理由は「自然保護」ということらしいが、一つの都市が他地域に遅れをとることなく発展していくためには、土地開発が不可欠なのである。開発のない地域は、次第に地域経済が衰退し、雇用機会の減少に伴って人口減を引き起こし、

県民所得の減少につながる。反対派は名古屋を過疎化させようというのであろうか。更に、自然保護を唱えているその中の何人が、万博誘致以前からも自然保護活動をしていたというのか。それにもかかわらず、わざわざパリにまで出かけて行って反対運動を行なうなど、名古屋の恥を国際世論にまき散らしているに等しい。

一方で賛成派の多くは、この地域独特の目立たず、万事控え目な県民性が災いして、派手な誘致活動も出来ずに反対派だけが目立ってしまった型になっている。

考えてみれば戦国時代、信長、秀吉、家康の三英傑を輩出しながら、いずれもこの地に日本の中心をもってくることをしなかった。更にその後、徳川七代將軍の後継をめぐっては御三家筆頭であるにもかかわらず、ナンバー二の紀州家に八代將軍の座をさらわれてしまっている。いずれも地味で引込み思案であり、争い事を嫌う県民性が影響しているように思えてならない。

この点が、同様に中枢機能が低下しているにもかかわらず、反東京への対抗意識という共通認識による強固な団結力で、万博を成功させ、関西国際空港を軌道に乗せつつ、今回またオリンピックに名乗りをあげている大阪圏との大きな違いである。

また一九九四年に、全国の約九〇〇人の女性を対象として行われた「好きな都市、嫌いな都市」の調査では、名古屋が「センスが悪い都市」「つまらない都市」の二項目でトップになっている。名古屋市内の博物館数は、京都、横浜に次いで全国3位であり、徳川美術館をはじめ、豊臣秀吉出生の地であり日本一高い赤鳥居を誇る中村公園、全国最大規模の名古屋港水族館、さらにライトアップされたテレビ塔とセントラルパークのロマンティックな夜景など、全国的に見ても存在価値の高い観光資源

を持ちながら、不思議なくらい街のイメージは低いものがある。質実剛健で自己完結型の社会であるため、外部に対する発信が全くなされてこなかった結果といえよう。

名古屋が二十一世紀に向けて国際的にも認知される都市に脱却していくためには、これまでの実利主義、排他性に満ちた内向的感覚を排除し、情報発信基地となるべく外向きの視点に立脚する「都市経営」に転換すべきなのである。

万博等のプロジェクトは、名古屋がハード面だけではなく、これまで持ち得なかった感覚的な面を習得する絶好の機会なのである。戦後の復興計画で、名古屋は全国各都市に大きな影響を与えた都市計画を策定したが、それ以来「街づくり」という観点での都市計画が皆無であったため、地下鉄東山線の延長による利便性によって東西のラインに街が広がってきた。しかし東京、大阪、あるいは京都に見られるような面としての街の広がりに欠けるため、都市全体の魅力に乏しい印象を受けるのである。そのため、市街地の連続性に意義を持たせた街づくりが望まれ、例えば名古屋の歴史を考える上で重要な意味を持つ堀川に沿って、名古屋城から五條橋、納屋橋、宮の渡し、名古屋港に至る南北の縦ラインにも街並みが整備されれば、名古屋の歴史を肌で感じることができるルートとして、外部的にもPRできるのではないだろうか。

また中部新国際空港においても、単に中部に新しい空港を造成するだけの位置づけでは、全国的な合意を得ることは難しく、全体計画の中の第二期工事（第一滑走路の延長及び第二滑走路の整備）までとはとても実現できるとは考えられない。しかし第一期工事の三五〇〇メートル滑走路一本だけでは、現在の名古屋空港と比較して格段に機能性がアップするとは言えず、国際レベルの空港とい

うには程遠い規模でしかない。そこで、この新空港における国内各地からのアクセス整備と国内線の全面的な乗り入れによる利便性を強く前面に打ち出し、全国区の新空港であるイメージを広く流布することが重要になってくる。そして反対派との確執が続ぎ、拡張の目途が立たない成田、建設費の高騰から多くの課題を抱える関空第二期工事に代わり、新ソウル国際空港やシンガポール・チャンギ空港に対抗できる日本唯一の国際ハブ空港を目指して、その名称も「新日本空港」あるいは「日本中央空港」としてPRすれば、全国的な支持を得ることができないだろうか。

現在、名古屋が推進しているこうしたプロジェクトは、一時的な経済効果としての開発に止まらず、住民意識の変革とトータル的な「街づくり」に大きく寄与するものであり、地域住民にとって機能的で利便性の高い都市サービスを提供することになるのである。

このことは、在名企業各社にとっても経営基盤が大きく強化されるばかりではなく、都市規模の拡大によって豊富な人材を確保できるなど、そのメリットは計り知れないものがある。二十一世紀を目前にした今こそ、名古屋財界が一枚岩となり、県、市を含めた官民の力を総結集して、関西圏を凌駕するような活力ある地域づくりに邁進していかなくてはならないのである。

松下幸之助はえらい！

—— 空気よ今夜もありがとう ——



デンソー労働組合

田中英司

〔プロフィール〕

- たなか えいじ (34歳)
- 1962年 8月28日タイガース優勝の年に生まれる (トラ年)
島根県松江市出身
 - 1985年 4月1日タイガース優勝の年に日本電装株式会社に入社
 - 1992年 日本電装労働組合専従
現在、(株)デンソー エンジン機器企画部在籍
- 〈家族〉 知立市にて妻・長男・長女と4人暮らし
- 〈趣味〉 読書、海釣り

小学校の時、何の授業だったのだろうか。担任の先生の話を覚えている。

「空気は人間が生きるために絶対に必要なもので、みんな空気を吸っているから生きているんだ。だけど、空気があることをありがたいたいと思うようなことはほとんどない。みんなも毎日を過ごしていて、空気があることに感謝したことなんてないだろう？」

おっしやる通りである。空気の存在なんて考えたこともない。「でも空気がないとやっぱし死んじゃうんだ。」小五のぼくたちは素直に納得したが、クラスのわたなべ君だけが自分は空気に感謝していると言いだした。

「でも毎日、『ああ空気さん、今日もありがとう』なんて思っているわけじゃあないだろう？」
わたなべ君は、いや毎日そう思っていると押し通し、お前はもういいと言われていた。

人は一人では生きていけないくせに感謝の気持ちやすぐに忘れるという悪い癖がある。困った場面で助けられたり、思いもよらない善意を受けた時に感じる感謝の気持ちも、喉元すぎればなのである。心に余裕のある時はいいが、余裕がなくなると周りが見えなくなりがちで、そういう時はますます、大切なものも大切に見えなくなる。そして感謝の気持ちを忘れる。

感謝というと宗教の話のようであるが、別に拝もうということではない。要は、いつ、いかなる時もプラス思考でいられるか、広い心でいられるかということだと思っている。

産政塾の中で松下政経塾に体験入塾させて頂いたが、その中の塾是を忘れずにいたいと思っている。

—— 一、感謝協力の事 ——

上杉鷹山になれるか

江戸の時代、九州高鍋の小藩から東北の名門上杉家に養子に入った上杉鷹山は弱冠十七歳にして米沢藩の藩主となった。

もともと上杉家はあの謙信公を祖とし、秀吉時代には会津一二〇万石を封ぜられたが、関が原の合戦をもつて米沢三十万石に減封された。その後も不祥事等あつて、鷹山が藩主となった時は十五万石の貧しい小藩であつた。当時、米沢藩は財政の悪化に苦しみ、借金もこれ以上できないという状況にあった。肥沃な土地でもないところに、一二〇万石当時の家臣団をそのまま連れてきたのがその大きな原因である。今で言えば、売り上げが八分の一に落ちたのに管理者の数は変わらないということである。歳入十五万石のうち十三万三千石が家臣の給料という状態であつた。しかも、名門。古いしきたりや形式的な礼儀ばかりが重んじられ、財政危機も汗をかいたり恥をしのんでまで考えるほどのものではないという土壌があつた。一方で財政はいよいよ抜きさしならぬ状況まできていた。

そこに上杉鷹山が登場する。彼は財政危機を目の当たりにし、再建を決意する。名門と無縁の新しい血だからそのものとも言える。リストラである。鷹山は、これまで藩の中で冷遇されてきた人間の中にこそ改革に理解を示す人物がいると判断し、冷や飯派を登用した。彼らは見事に鷹山の期待に応え、意を汲んだ改革案を次々と打ち出し実行に移していく。改革に最も障害となつたのは既得権益のある家臣重臣たちであつた。上杉家に代々仕える家臣たちは藩が潰れてもよいなどとは思わないが、由緒ある伝統は守り抜かねばならない、財政再建の総論は賛成だが、自ら汗をかく（鷹山は藩士とそ

の家族にも桑植えや機織りなどの労働を呼びかけていた）のは反対という考えに固執した。しかし、鷹山本人が見本を示し国中を馬で歩いて呼びかけ、また腹心の身を捨てての努力の結果、米沢藩の財政再建は成功した。今の世にこんな政治があればと思うような実話である。

鷹山が苦難の末、成功し本意を果たしたのにはいくつかのポイントがある。

- ① 名門上杉家の人間ではなく、古いしきたりにとらわれなかった。
 - ② 意を汲む有能な仲間を冷や飯派の中から探し出し、彼らが見事に役割を果たした。
 - ③ 米沢の国中を歩き周り、米づくり以外にやれることをみつけた。
 - ④ 木綿の服に一汁一菜、桑植えなど、自らも改革の一員となった。
 - ⑤ 藩主や藩のため、上杉家のためではなく、藩民のための改革であるべきとした。
- これを一般論に置き換えると、

- ① 形式にとらわれず、常に新しい目でものごとを見る。
- ② 人を活かし、組織的にことを進める（良い人材を発掘し自らの不足を補う）。
- ③ 現地現場（現物）主義に立つ。
- ④ 自ら模範を示す。

- ⑤ 私利私欲を捨て、公の立場でことにあたる。

どれをとっても学ぶべきことであるが、ぼく自身にとって最も大切と思うのは、鷹山が示した「率先垂範」の精神である。何事も志がなければ成し遂げられないから、何をさておき何がしたいのか、どうありたいのかということがなければならぬが、これは人それぞれ、もっと言えば局面局面でお

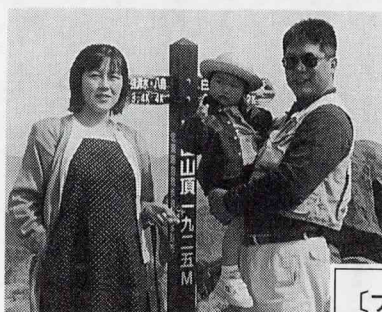
のずと生まれてくるものだと思っている。政治家の鷹山のように自分の国を治めるべき立場でもないし、明日からネパールに水道施設を作りにいこうというものでもないのだ。けれど、志を立てた人間自ら先頭を切って動く、周りの協力を求めるなら見本を示す、という姿勢がなければ実を結ばない。口で言い、頭で考えているだけではだめだということを教えられたような気がした。

今回、縁あって中部産政塾の塾生として一年間、他企業、他業種の方々と交流を深める機会をいただいた。日頃の会社生活や私生活ではまず関わりあうことのできない方とも、接することができ、それ自体が大変有意義であったが、メンバーの多くが三十前後の年代であり、同世代ならではの同じ合う部分が多かったのがうれしかった。

この三十才前後というのは、中部産政塾のメンバーのみならず、心身ともに充実し何事にも精神的になれる時期なのだろうが、同時に、社会においても家庭においても、年々、大きな責任を求められてくる世代でもある。何も考えずに突っ走ってきた二十代とは環境が違う。周りをよくみることも必要だし、自分を確かめることも大事である。中部産政塾の活動を通じて様々な講師の方々の考え方や生き方に触れ、己を振り返る良い機会づくりとさせて頂いたことを感謝申し上げたい。

というわけで、来年の書き初めタイトルは「感謝協力」と「率先垂範」なのである。

「小説 労働組合消滅のとき」



(財)中部産政研

佐 宗 正 典

〔プロフィール〕

さそう まさのり (34歳)

- 1962年 愛知県岡崎市生まれ
 - 1986年 アイシン精機入社
 - 1992年 労働組合業界に入る
全ト・産政研派遣
 - 1996年 単組に戻り産業政策部長
- 〈家族〉 妻、長女、長男 (12月2日)

〈目標〉 自主独立

〈モットー〉 Heaven helps those who
help themselves.

プロローグ

株主総会の直後、私は社長室に呼ばれた。それも緊急な用件であるという。

人事部長である私は、例年通り平穩に終わつた株主総会に対しての労いかとも思つたが、それにし
ては「緊急」という言葉が何か引つ掛かる。

私はとりあえず新社長の元へ急ぐことにした。

社長の言葉はこうだった。

「今から三年以内にうちの会社から労働組合を消滅させてくれ。組織としては残しても実質的に解
体できればいい。三年以内だ。君にも判っていることと思うが、これからの時代は何よりもスピー
ドがものをいう時代だ。今までのように何事も合議でものごとを進めていては時代に乗り遅れる。社
長である私の判断に対して迅速に対応できる組織が必要だ。全ての会社施策に対して、滝が流れ落ち
るようにすばやく浸透できる組織が必要なのだ。今の組織では、誤りは少ないかもしれないがすばや
い対応はできない。これから私は大々的に組織を変革していきたいと思っている。そのためには、何
事も慎重に慎重にと一つ覚えのように繰り返す今の組合は邪魔者以外の何者でもない。」

社長は自らを落ちつかせるように煙草に火を着け、そして続けた。

「金はいくら使ってもかまわない。必要ならば委員長に金を握らせ、女を抱かせて、骨抜きにする
のもいい。とにかくマスコミ沙汰にならないことだけ注意してやってくれ。」

これが新社長の私への最初の指令だった。

社長は今年四十五歳。日本の私立大学を卒業後、アメリカに留学しMBAを取得。現地のコンピュータ関連のメーカーに入社しバイスプレジデントまで務めたやり手である。

今年になって突然帰国し、今回の株主総会で父親である前社長から社長の椅子を禅譲された創業三代目の文字通りプリンスである。

我が社は先々代が、戦前小さな町工場から細々始めた自動車部品メーカーで、二代目の時に折からのモータリゼーションの波に乗り、売上げは右片上がりで伸びてきた。会社の規模もそれに連れて大きくなり、従業員も今では五千人を越える規模になった。

労使関係も先代社長とベテランの現委員長の間では、共に会社を育ててきたという自負のもと良好な関係が維持されてきていた。上部団体にも加盟し、その中でも中堅に位置づけられ、労連内でも指導的な役割を負うようになってきたところだった。

私自身迷った。社長の言うことが全て間違っているとは思われなかった。むしろ共感できるところの方が多かった。今の会社の状況は、あまりにも暖たかで居心地が良すぎるのではと頃頃から感じていた。たまたま自動車産業の追い風の時期に会社に居たというだけで、努力もせずには偉くなったヤツも大勢いる。部門長会議での覇気の無さには虫酸が走る。今の地位に安住し、思考を停止していると

しか思えないヤツが半数以上だ。事業部長からヤレと言われれば、そのまま部下に丸投げするだけ。

自分では何も判断を加えず、自分が窮地に立たないための算段だけには長けている。こんな陣容で今の業績が維持できること自体不思議なくらいだ。この状況をなんとかしなければ、後に続く課長・係長級に与える影響も大きいし、何より二十一世紀に会社が存続するかどうかとも判らない。

変化は必要だった。刺激も必要だった。確かにこの社長は、会社にとっても組織にとっても、いい意味でも悪い意味でも刺激になる。いいチャンスだ。しかし……。

失敗したときは全てを失う。

これは賭だった。会社にとっても、私にとっても。

様々な判断が瞬時に私の頭を駆けめぐった。そして至った結論はこうだった。

「やりましょう。全身全霊をかけて。」

具体化

まず始めに考えたことは、組合員のうちの層が一番現状の組合活動に疑問を抱いているのかという事だった。今は事務・技術の別なく、技能員との区別もなく、一律、管理職以外は同じ組合員として扱われている。賃上げにしても組合員平均いくらかというもので、配分にいくらかの差はあるものの大方一律の管理と言ってもいい状態だった。

どこかに必ず綻びがあるはずだと考えた。どこが一番不満の多い層か資料をあたってみた。

組合の機関紙を見ても、議事録を見ても、また組合役員に聴いても技術部の大卒の人間が一番切り崩し易く思えた。

まず、能力主義・成果主義を処遇の中心に据えること。そして、出来のいい者とあまり良くない者との間に大きな賃金格差を容認させるように持っていく。そして賃金改定交渉において組合が関与できる余地を可能な限り少なくし、最終的には会社対個人の賃金改定交渉に持ち込めるようにしていくこと。つまり団体交渉が意味をなさないようにしていくことが狙いだった。

狙いは的中した。技術系の人間は仕事に対しての忠誠心はつよいが、同胞としてのまとまりには大して意義を見いだしていなかった。さらに、昇給やその結果としての賃金に、たとえ同期入社といっても大きな格差が付けば尚更なことだった。

思い通り、この層については春の取り組みの結果よりも、個人別の賃金改定交渉に意識が集中するようになり、事実上組合活動から離れる結果となった。それ以上に現行の組合費のチェックオフに疑問すら抱くようになった。思い通りである。私は順次大卒事務系から現業系の職長以上に対してもこの方策を進めて行った。

事務系までの能力主義・業績主義の導入については組合の抵抗もあまりなかったが、この制度を現業系まで拡大するには少しばかり時間がかかった。組合にとっては現場はやはり、よって立つ基盤だ

から抵抗も大きかった。

私は次の様な手で抵抗を突き崩していった。それは執行部の構成をじょじょに大卒比率を高めていくという手だった。わが社においても会社が大きくなるにつれて間接比率が高まり、大卒の大量採用時代を経た後は四十％を越えるまでになっていた。

組合執行部も従来の様な現場たき上げ人材だけでは対応できないことも多くなり、また活動の場も広まるにつれて大卒執行委員の重要性が増してきたおりだったため、八人いる専従のうち書記長はじめ四人までを大卒執行委員にすることに成功した。もちろん不当労働行為に当たらないよう注意深くおこなったことは言うまでもない。

彼らは元来現場の辛さや苦しさといったものとは違う世界に住んでいる。また住もうとしている。だから「現場独特の気持ち」のようなものを汲み取ることは苦手であり、また、自分たちの世界で通用する理屈を現場に持ち込むことにもあまり抵抗がなかった。

これで今までの「会社対組合」という集団対集団の図式から「会社対個人」という図式への変更の第一段階が終了した。

次の一手

組織は不満や危機感があるとまとまるものだ。その反対にある程度の満足感と安心感が蔓延すると組織は緩む。

まず満足感についてだが、これは少々原資がいったが、公式発表賃上げ数字に対して裏で上乗せす

るという方策を採った。組合執行部に対しては恩を売った形になるし、従業員に対しては「うちの会社は・・・」という気持ちにさせることになる。

また、その他労働諸条件や福利厚生施策においても同業他社に比して少し上積みすることも忘れることはなかった。

安心感ということでは「労使協調」ということばをことさらに続けることに専心した。少しも疑念を差し挟まれないように注意しながら事有るごとに何度も何度も。

さらに組合の日常業務の中での最大の機能である「苦情処理」についても会社としてのルートを整備した。これは今までインフォーマルで機能していた班長会・組長会・係長会の各階層会をフォーマルな会社機能とし専任の事務局を置き、それぞれで意見集約・苦情集約を行った上でその代表と部次課長会や時には役員との懇談会の場を定期的に持つようにし、具体的な解決策もその会議での議論を踏まえた上で会社としてとるようにしていった。そしてこの組織を事実上の第2組合・従業員の過半数からなる従業員代表組織と言えるまでに育て上げていった。また、個人的な相談や悩みに対して専任のカウンセラーと契約して会社の外で解決できるように手を打った。

やることはやった。打つべき手は打った。これらの方策によって従業員が日常において労働組合を頼る場面は殆どなくなってきた。イコール労働組合の必要性を感じなくなってきた。会社に対しての信頼感は従来以上に高まっていた。

仕上げの時

ここまでに二年半の時間がかかった。この間、わが社をとりまく環境はかなり厳しいものとなっていた。いままで自動車産業が迎えたことのない、生産台数対前年比三年連続マイナスを経験することとなった。

しかし、わが社の業績自体は減収はしかたないとしても、VA/VEや系列外取引、自動車関連外商品の開発や海外生産が軌道に乗ったことなどが功奏し増益基調にあった。これも、社長の命があったからとは言え、従来にも増す従業員に対する手厚い配分がものを言い、全体のモラル・やる気といったものが高まったことが大きく影響していた。特に回りのメーカーがシュリンクしている時に大きく従業員に対して配分を行い、また設備投資に資金を振り向けたことがいい結果をまねくことになった。

そんなある日、社長から呼び出しがあった。

「うまくいっているようだが、計画の進捗状況はどうだ。約束の三年にあとわずかだが。」

私は応えた。

「はい。現状において労働組合の必要性を感じている組合員は一割程度に過ぎません。それも、例の業績重視・能力主義人事制度でマイナスの査定を受けている言わば会社にとってのお荷物 の存在の者ばかりです。彼らが大きな力となる可能性は大変低いと言えます。」

「さらに、この秋の労働組合の定期大会についての論議の中心は組合費の値下げやさらに一歩進んでの労働協約のクローズドショップ制の是非を問うものに終始しております。機は熟したと言えると思います。」

「よい。そろそろ労働協約の改定提案を行っても大きな抵抗には会わない、というよりむしろ従業員には歓迎されるだろうということだな。」

「はい。その通りです。」

「労基法上の押さえは大丈夫か。」

「はい。たとえ組合が無くなったからといっても、それに代わる従業員代表組織は確保しておりますので問題はありません。」

「ところで、労働組合機能を会社が担うことで発生したコストはどのくらいと見積もるか聞かせてくれ。」

「ざっと年間五億にはなろうかと思っています。班長会・組長会・係長会それぞれの専任スタッフが計五名五千万円、毎月の会合でのアワーレート並びに出張旅費が三千万。法定外福利厚生費のアップ分が一億五千万。賃上げの補正分が二億五千万といったところです。」

「かなりの出費だな。労働組合を上手に使ってうまく会社と機能分担すれば、ゼロとは言わないまでもかなりの部分を組合費という形で、彼ら自身に負担させることが出来たのか。」

「よし。それでは最終段階に進んでくれ。」

エピソード

社長の思惑どおり、斬新な経営戦略とそれを支える人材・人事戦略は見事に当たり、社業は拡大し私も役員に名を連ねることになった。

しかし、栄華は長続きするものではなかった。十年後、社長が急死し、その後継としてまだ若い社長の長男が新社長に就任した。悲劇はそれからだった。

だれも彼を止められなかった。

前社長が優秀であっただけに、組織全体が社長を中心にすべて動く形態になっていた。一声でうむを言わず動かざるを得ない形になっていた。どこにも反対の意見を差し挟む余地のないように出て上がっていたのだった。

私自らの手で、カウンターパワーとなるべき労働組合までも亡くしてしまったとは・・・。

一度暴走しはじめた新社長は止まることを知らなかった。

業績は悪化の一途。優秀な人材は早々に退社し、会社は事業部ごとに分割され吸収されることになった。売上げ二兆円の企業も無くなるときは早いものだった。二十一世紀最大の大倒産となってしまうった。

おわり

産政塾活動記録

第一回会合

- ・日時 平成七年十二月十九日(火)
- ・会場 愛知労済豊田会館三階 第二会議室
- ・内容 開塾式 塾長梅村志郎を囲んで討論

第二回会合

- ・日時 平成八年二月十六日(金)～二月十七日(土)
- ・会場 アイシンリゾート治部坂「悠遊館」
- ・内容 ネパールの山村に水道を贈る運動を通じて
文化交流グループ「風の權」石原淳宏氏





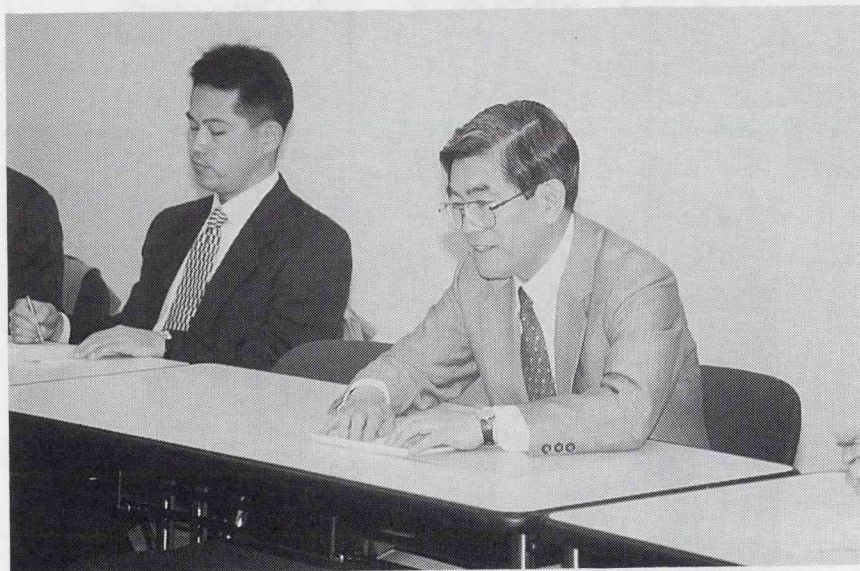
第三回会合

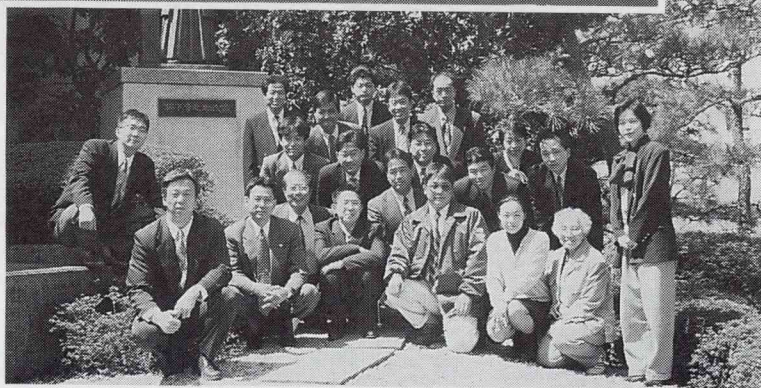
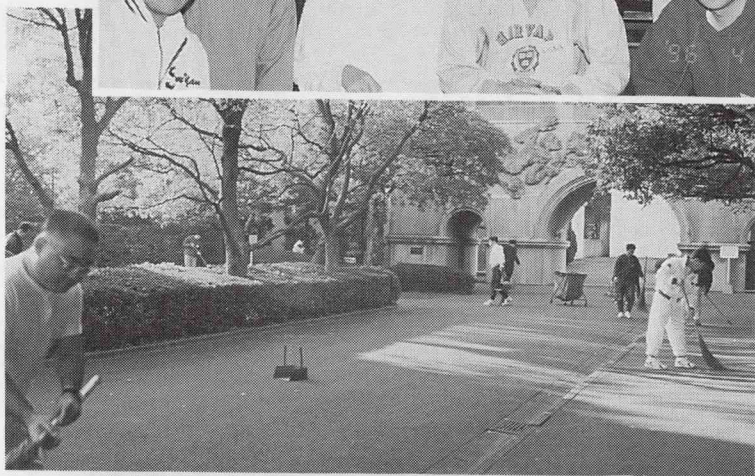
- ・日時 平成八年三月二十六日(火)
- ・会場 豊田自動織機「シャインズ」
- ・内容 海外生活で大切なこと

―コミュニケーションを中心に―
中部産政研 顧問 足達廣紀

第四回会合

- ・日時 平成八年四月十二日(金)～十三日(土)
- ・会場 (財)松下政経塾(神奈川県茅ヶ崎市)
- ・内容 「松下政経塾との対決」
松下政経塾への体験入塾と交流





第五回会合

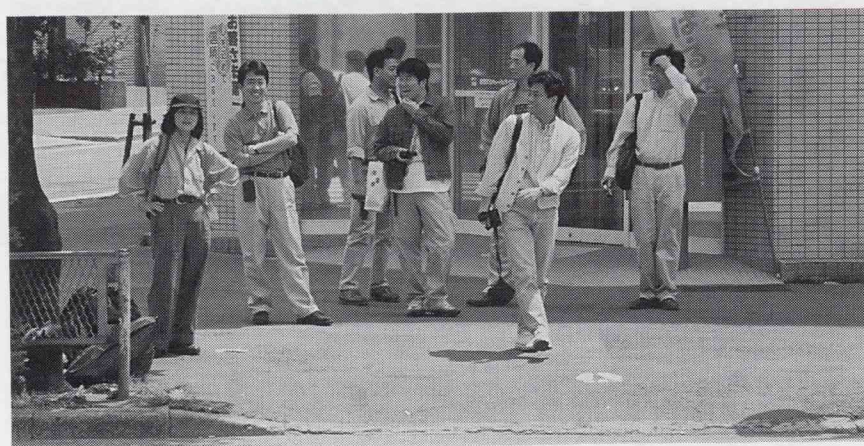
- ・日時 平成八年五月十二日(日)
- ・会場 名古屋市中区大須
- ・内容 実践「フィールドワーク」万物鑑札 大須界限編
岡本信也・岡本靖子 夫妻

第六回会合

- ・日時 平成八年七月八日(月)
- ・会場 岐阜市民会館
- ・内容 「長良川河口堰本格運用後一年の環境への影響について」
——サツキマスの遡上の研究を中心に——
サツキマス研究会代表 新村安雄氏

第七回会合

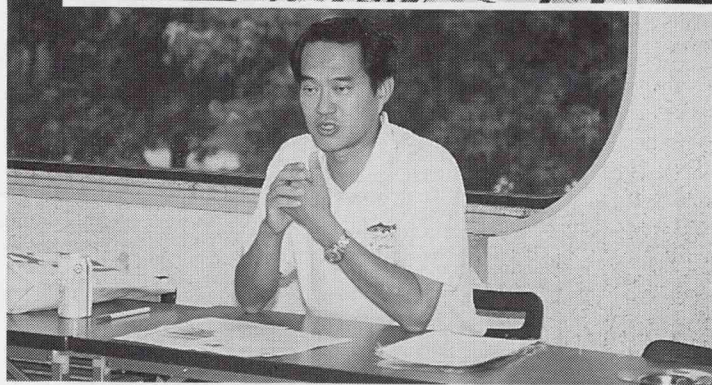
- ・日時 平成八年八月二十六日(月)～二十七日(火)
- ・会場 全トヨタ労連つどいの丘



・内容

驚異のパワー西洋式「気」の実践

豊生ブレイキ工業労働組合 清水明彦氏



産 政 塾

1997年8月29日 第1刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471

愛知県豊田市山之手8丁目131番地

愛知労済豊田会館

TEL 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本

塾 政 産

塾 長 梅村 志郎

塾 生

アイシン 労組	川村 博隆
豊田 市役所	阿久津正典
㈱ デンソー	村瀬 俊
豊田 合成 労組	河路 直人
全トヨタ 労連	小林 雅昭
松坂屋 労組	臼井 満
中部 電力 ㈱	星野 悟
中部 電力 労組	柴田 伸彦
トヨタ自動車 ㈱	小倉 克幸
アイシン 精機 ㈱	勝見寿美子
トヨタ自動車 労組	西田 明生
日本特殊陶業 ㈱	高橋 剛
トヨタ車体 ㈱	吉田 茂
丸 栄 労 組	三川 高市
㈱ 東海銀行	高井 康之
名古屋鉄道 ㈱	吉川 篤史
日本電装 労組	田中 英司
㈱ 中部産政研	佐宗 正典